鎌倉市二階堂
国指定史跡

永福寺跡

国指定史跡永福寺跡史跡整備
事業に係る発掘調査報告書
－平成19年度－

平成23年3月

鎌倉市教育委員会

国指定史跡　永福寺跡

平成二十三年三月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市二階堂
国指定史跡

永福寺跡

国指定史跡永福寺跡史跡整備
事業に係る発掘調査報告書
－平成19年度－

平成23年3月

鎌倉市教育委員会

序　文

鎌倉市教育委員会
教育長　熊代徳彦

史跡永福寺跡は、昭和56年度の試掘調査から平成8年度まで17年間にわたる発掘調査によって、それまで幻とされてきた寺院の姿を明らかにしてきました。

二階堂・薬師堂・阿弥陀堂が複廊で繋がり、翼廊・中門・釣殿といった寝殿造り風の建物と一体の建物群を構成していること、建物の前面には大きな池があり橋がかけられていたこと、背景となっている山の上にも人の手が加わり、堀割や経塚などが作られているなど、これまでに多くのことがわかりました。

これらの建築群や庭園は釈迦・阿弥陀・薬師如来の浄土として、奥州攻めで亡くなった源義経・藤原泰衡ほかの諸霊を慰めるにふさわしい場と言えるでしょう。

本書は、平成19年度に国庫・県費補助を受けて実施した三堂裏手の追加調査成果をまとめたものです。

今回出土したのは、堂裏の切岸の下に作られた大きな溝や、柱穴・整地面などの遺構、当時葺かれていた瓦を中心とする大量の遺物です。

溝は、昭和62年度と平成元・4・6年度の調査で確認されていたものの延長で、特に今回は切岸との関係や規模・作り変えの様子など多くの情報を得ることができました。

これで永福寺の中心部分の様子がほぼすべて明らかになり、より鮮明な永福寺像が見えるようになったといえるでしょう。

鎌倉市では現在、発掘調査の成果や文献史料をもとに史跡永福寺跡の環境整備を行っています。

今回の調査成果も最大限に生かし、永福寺の歴史的価値を後世まで伝えてゆけるような整備を目指します。

調査の実施・本報告書の刊行に際しましては、史跡永福寺跡整備委員会の委員・周辺住民の皆さま・関係者の方々には大変お世話になりました。末筆ではございますが、心からお礼を申し上げます。

例　言

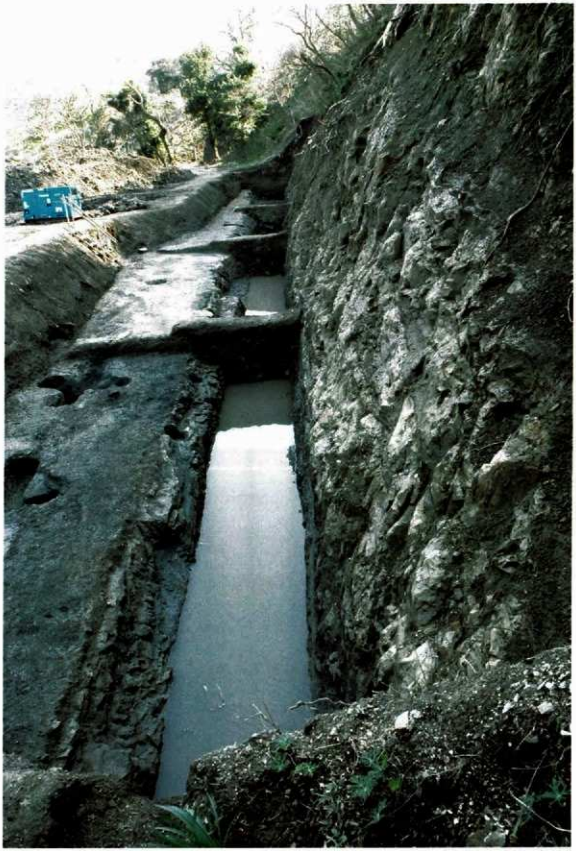
1．本報は国庫及び県費補助を受けて、平成19年度に実施した神奈川県鎌倉市二階堂所在「国指定史跡永福寺跡」の史跡整備事業に係る発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は鎌倉市教育委員会が実施し、史跡永福寺整備委員会・文化庁・神奈川県教育委員会の指導・助言を受けた。
3．本報の執筆は、第1章と第2章、第3章第3節を永田史子が、第3章第1・2節、第4章を福田誠が行った。挿図及び図版作成は、調査員・調査補助員が分担しこれにあたり、編集は福田が行った。
4．本報に使用した遺構の空撮写真は、（株）シン技術コンサルの撮影したものを使用した。また遺構の個別写真は福田、永田が撮影し、遺物写真は須佐仁和・田畑衣理が撮影し、福田が版を組んだ。
5．本報中で使用している岩石の名称は、鎌倉で一般的に呼ばれている俗称を使用した。
　土丹（ちたん）…泥岩、鎌倉石（かまくらいし）…凝灰砂岩、伊豆石（いずいし）…安山岩
6．本報中で使用している遺構名等の名称は、平成14年度に刊行した『永福寺跡発掘調査報告書』で、統一して使用している名称である。
7．本報で使用している座標は、国土座標の日本測地系を世界測地系に変換したものである。
8．遺物出土位置データの管理および本書に提示した遺物出土分布図の出力には、藤野修一氏のご厚意により、（有）ネオテリック製「Site Research System」を使用させていただいた。
9．調査機関　鎌倉市教育委員会

発掘調査

調査担当　福田 誠（生涯学習部文化財課嘱託職員）
　　永田史子（生涯学習部文化財課技術職員）
調　査　員　石元道子（生涯学習部文化財課臨時的任用職員）
　　鈴木絵美（生涯学習部文化財課臨時的任用職員）
調査補助員　高橋奈美（生涯学習部文化財課臨時的任用職員）
　　平井里永子（生涯学習部文化財課臨時的任用職員）
作　業　員　（社）鎌倉市シルバー人材センター
　　田島道夫 中須洋二 佐野吉男 田口康雄 秋田公佑 清水政利 小口照男 赤坂 進 鯉沼 稔
　　浅香文保 片山 昭 杉浦永章 片山直文 沼上三代治 宝珠山秀雄 永井隆三郎 河原龍雄
　　倉澤六郎（順不同）

整理作業

調査担当　福田 誠（生涯学習部文化財課嘱託職員）
　　永田史子（生涯学習部文化財課技術職員）
調　査　員　石元道子（生涯学習部文化財課臨時的任用職員）
　　押木弘巳（生涯学習部文化財課臨時的任用職員）
調査補助員　須佐仁和（生涯学習部文化財課臨時的任用職員）
　　田畑衣理（生涯学習部文化財課臨時的任用職員）
　　岡田慶子（生涯学習部文化財課臨時的任用職員）
　　平井里永子（生涯学習部文化財課臨時的任用職員）
　　平山千絵（生涯学習部文化財課臨時的任用職員）
　　佐藤ななみ（生涯学習部文化財課臨時的任用職員）



1．Ⅰ区全景（北側から）

口絵２

１．Ⅰ区空撮（右が北）

２．Ⅱ区全景（岩盤面と２溝）

－本文目次－

第１章　史跡永福寺をめぐる地理的・歴史的環境……1
第２章　これまでの整備事業と調査経緯……1
　第１節　これまでの整備事業……1
　第２節　調査経緯……6
第３章　検出された遺構と遺物……6
　第１節　土層堆積状況……6
　（1）Ⅰ区……6
　　ａ．北壁セクション……6
　　ｂ．Ａセクション……9
　　ｃ．Ｂセクション……9
　　ｄ．Ｃセクション……9
　　ｅ．南壁セクション……9
　（2）Ⅱ区……9
　　ａ．東壁セクション……9
　第２節　調査成果……10
　（1）Ⅰ区の調査（図６）……10
　　ａ．位置と面積……10
　　ｂ．検出遺構（図７・８）……10
　　・溝Ａ……10
　　・２溝……10
　　・切岸……10
　　・貝砂敷きの通路状遺構……10
　　・柱穴列……10
　　・二階堂背後の柱穴……14
　　ｃ．出土遺物……14
　　・Ⅰ区１面まで出土遺物……14
　　・Ⅰ区２面まで出土遺物……14
　　・Ⅰ-Ａ区光波取り上げ遺物……14
　　・２溝上層……15
　　・２溝下層……15
　　・瓦類……15

（2） Ⅱ区の調査（図9）……16
a．位置と面積……16
b．検出遺構……16
・2溝……16
・切岸……16
c．出土遺物……16
・瓦以外の2溝出土遺物……16
・瓦類……16
第3節 Ⅰ－A区の遺物出土状況……63
第4章 まとめ……68

－挿図目次－

図1 遺跡位置図 ……2
図2 測量基準点位置と国土座標 ……3
図3 調査区の座標図 ……4
図4 調査地点位置図 ……5
図5 2溝土層断面図 折り込み ……7
図6 Ⅰ区全測図 折り込み ……11
図7 二階堂背後遺構平面図 ……13
図8 十字形柱穴エレベーション図 ……14
図9 Ⅱ区全測図 ……16
図10 Ⅰ区1面まで出土遺物・2面まで出土遺物・光波取り上げ遺物 ……17
図11 Ⅰ区2溝上層出土遺物 ……18
図12 Ⅰ区2溝下層出土遺物 ……19
図13 Ⅱ区2溝出土遺物 ……20
図14 蓮華文鐙瓦 ……21
図15 巴文鐙瓦 ……22
図16 巴文・寺銘・その他鐙瓦 ……23
図17 その他の鐙瓦 ……24
図18 その他の鐙瓦 ……25
図19 唐草文字瓦 ……26
図20 唐草文字瓦 ……27
図21 唐草文字瓦 ……28
図22 唐草文字瓦 ……29
図23 唐草文字瓦 ……30
図24 唐草文字瓦 ……31
図25 剣頭文・その他の字瓦 ……32
図26 その他の字瓦 ……33
図27 男瓦A類 ……34
図28 男瓦B類・男瓦D類 ……35
図29 女瓦A類 ……36
図30 女瓦A類 ……37
図31 女瓦A類 ……38
図32 女瓦A類 ……39
図33 女瓦A類 ……40
図34 女瓦A類 ……41
図35 女瓦A類 ……42
図36 女瓦A類 ……43
図37 女瓦A類 ……44
図38 女瓦A類 ……45
図39 女瓦B類・女瓦C類 ……46
図40 女瓦C類 ……47
図41 女瓦C類 ……48
図42 女瓦C類 ……49
図43 女瓦C類 ……50
図44 女瓦D類 ……51
図45 女瓦D類 ……52
図46 女瓦D類 ……53
図47 女瓦D類 ……54
図48 女瓦D類・女瓦E類・鬼瓦 ……55
図49 人名・寺銘・押印文字瓦 ……56
図50 寺銘押印文字瓦 ……57
図51 寺銘押印文字瓦 ……58

図 52　寺銘押印文字瓦……58
図 53　記号瓦……60
図 54　記号瓦……61
図 55　記号瓦……62
図 56　A区の遺物出土状況……65
図 57　男瓦・鐙瓦の出土状況……65
図 58　女瓦・宇瓦の出土状況（Ⅰ期）……66
図 59　女瓦・宇瓦の出土状況（Ⅱ・Ⅲ期）……66

表　永福寺出土瓦の型式分類表・出土遺物観察および法量表……69

－写真図版目次－

図版 1　Ⅰ区全景（空撮）……77
図版 2　Ⅰ-A区　溝A……78
図版 3　Ⅰ区２溝上層……79
図版 4　Ⅰ区２溝上層……80
図版 5　Ⅰ区２溝上層遺物出土状況……81
図版 6　Ⅰ区２面全景……82
図版 7　Ⅰ区２面の遺構……83
図版 8　Ⅱ区……84
図版 9　Ⅰ区のセクション……85
図版 10　Ⅰ区のセクション……86
図版 11　Ⅰ区１面まで、２面まで出土遺物……87
図版 12　Ⅰ区２溝上層出土遺物……88
図版 13　Ⅰ区２溝下層、Ⅱ区２溝出土遺物……89
図版 14　鐙瓦……90
図版 15　宇瓦……91
図版 16　男瓦・女瓦A類……92
図版 17　女瓦A・B類……93
図版 18　女瓦C類……94
図版 19　女瓦D・E類、鬼瓦……95
図版 20　文字瓦、樹皮、頭骨……96

第１章　史跡永福寺をめぐる地理的・歴史的環境

史跡永福寺跡は、神奈川県鎌倉市二階堂、現在の JR 鎌倉駅の北東約 1.8km に位置する。鎌倉の外郭をなす丘陵に囲まれた谷の一画であり、史跡の中心部分からは西ヶ谷・杉ヶ谷・亀ヶ谷・獅子舞などの谷が伸びている。

主要伽藍はその中心となる平坦地に位置し、崖を背負って東面する伽藍配置である。正面には苑地が広がっていたことが明らかとなっているが、その東側対岸は二階堂川を挟んですぐに丘陵が迫っている。北東側から南側の谷戸を抱えるようにして延びるその丘陵上には、永福寺創建期に築かれたと考えられる経塚が存在する。

現在、永福寺の中心部には北西に伸びる谷戸（西ヶ谷）から二階堂川へ、一筋の水路が流下している。一年を通じて比較的流量の安定した水路であり、過去にも苑地の水を供給していたことが想像される。元々、湧水や山からの水など水気が多い土地で、公有地化以前は水田が営まれていたこともある。

調査地付近には現在「二階堂」という地名が残っており、主要伽藍の位置は「三堂」という小字名で呼ばれるなど、廃寺となって久しい永福寺の存在を今に伝える重要な手がかりとなっている。「二階堂」は『吾妻鏡』等の文献ではしばしば永福寺そのものをさす語として現れており、永福寺の本堂にあたるものである。「三堂」とは二階堂と阿弥陀堂・薬師堂を総称したものであろう。

永福寺そのものに関する記述は、『吾妻鏡』、『海道記』などに見られ、当時の様子を知るための貴重な資料となっている。『吾妻鏡』における永福寺の初見は文治五年（1189）の条であり、その後建久五年（1194）年までに二棟の脇堂が建立され、「三堂」が並ぶ形態となったことがわかる。

永福寺は奥州合戦等における戦死者の供養のために源頼朝が建立した寺として知られる。源三代将軍の間、仏事を執り行うのはもちろんのこと、ときに蹴鞠や花見を楽しむ場所として永福寺はあり続けた。しかし、しばしば火災にあい、そのつど再建を繰り返している。建暦元年（1211）には総門が焼失したほか、北条氏の時代に移ってからも、永福寺は再三の火事により、被害を受けている。また、寛元・宝治年間には老朽化した二階堂・脇堂の修理が行われた。

これらの火災や、建て替え・修理などの記事は、発掘調査において遺構の年代決定に関する重要な定点ともなっている。

鎌倉幕府の滅亡後も、足利氏による庇護のもとに永福寺は存続し続けていたようであるが、享徳三年（1454）の奥書をもつ『殿中以下年中行事』における記事以降、永福寺に関する資料は途絶えてしまう。おそらくその前後に廃寺となったと考えられるが、詳しい時期については依然として不明である。

第２章　これまでの整備事業と調査経緯

第１節　これまでの整備事業（図３）

史跡永福寺跡は昭和 41 年に国の史跡指定を受け、昭和 42 年から現在まで、国・県の補助金を得て順次土地の公有地化が図られている。その間、整備に向けて昭和 56・57 年度に確認調査を実施し、昭和 58 年度からは本格的な発掘調査を開始した。発掘調査は平成 8 年度まで毎年行い、苑地の形状、主要伽藍の配置を明らかにしている。また、伽藍の東側に面する丘陵部の調査も行っており、永福寺創建期の経塚や堀切などが確認された。各年度の調査内容については表と、図３に記したので参照していただきたい。

本年度（平成 19 年度）から、これまでの発掘調査成果や資料調査を元に作成した『史跡永福寺跡保存整備基本計画』（平成９年度）をもとに、三堂基壇・苑地の復原に着手した。本年度はその一環として、まず苑地部分について土砂搬出・造成工事を行った。また、平成 20 年度着手予定となって

図１　遺跡位置図

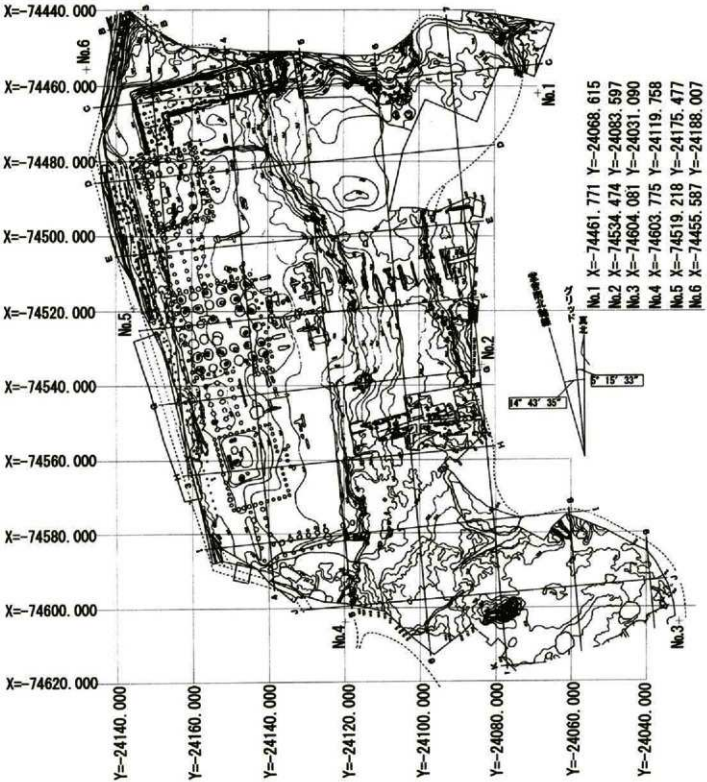


図２　測量基準点位置と国土座標（世界測地系）　S=1/1000

いる基壇と苑地についての本格的な復元造成工事に必要な情報を得るため、三堂背後の切岸下に残っていた未発掘調査部分について、整備に必要な地下の状況を知るための調査を実施することとなった次第である。

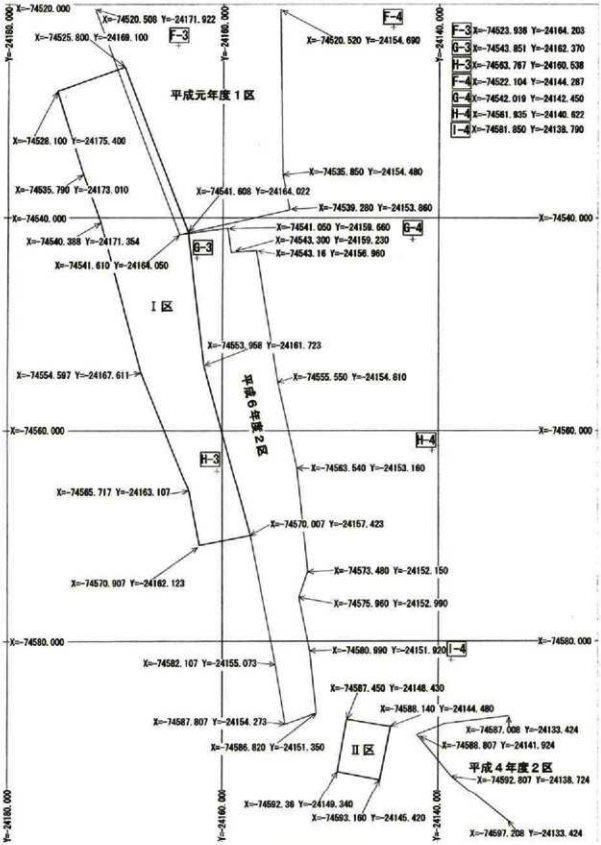

X=-74520.000
Y=-24160.000
X=-74520.508 Y=-24171.922
X=-74525.800 Y=-24169.100
F-3
平成元年度１区
X=-74528.100 Y=-24175.400
X=-74535.790 Y=-24173.010
X=-74540.000
X=-74540.388 Y=-24171.354
G-3
X=-74541.610 Y=-24164.050
Ⅰ区
X=-74554.597 Y=-24167.611
X=-74560.000
H-3
X=-74565.717 Y=-24163.107
X=-74570.907 Y=-24162.123
X=-74580.000
X=-74582.107 Y=-24155.073
X=-74587.807 Y=-24154.273
X=-74586.820 Y=-24151.350
X=-74592.36 Y=-24149.340
X=-74593.160 Y=-24145.420
Y=-24140.000
F-4
X=-74520.520 Y=-24154.690
X=-74535.850 Y=-24154.480
X=-74541.608 Y=-24164.022
X=-74539.280 Y=-24153.860
X=-74541.050 Y=-24159.660
X=-74543.300 Y=-24159.230
X=-74543.16 Y=-24156.960
G-4
X=-74553.958 Y=-24161.723
X=-74555.550 Y=-24154.810
平成６年度２区
X=-74563.540 Y=-24153.160
X=-74570.007 Y=-24157.423
X=-74573.480 Y=-24152.150
X=-74575.960 Y=-24152.990
X=-74580.990 Y=-24151.920
I-4
X=-74587.450 Y=-24148.430
X=-74588.140 Y=-24144.480
Ⅱ区
F-3 X=-74523.938 Y=-24164.203
G-3 X=-74543.851 Y=-24162.370
H-3 X=-74563.767 Y=-24160.538
F-4 X=-74522.104 Y=-24144.287
G-4 X=-74542.019 Y=-24142.450
H-4 X=-74561.935 Y=-24140.622
I-4 X=-74581.850 Y=-24138.790
X=-74587.008 Y=-24133.424
X=-74588.807 Y=-24141.924
平成４年度２区
X=-74592.807 Y=-24138.724
X=-74597.208 Y=-24133.424

図３　調査区の座標図

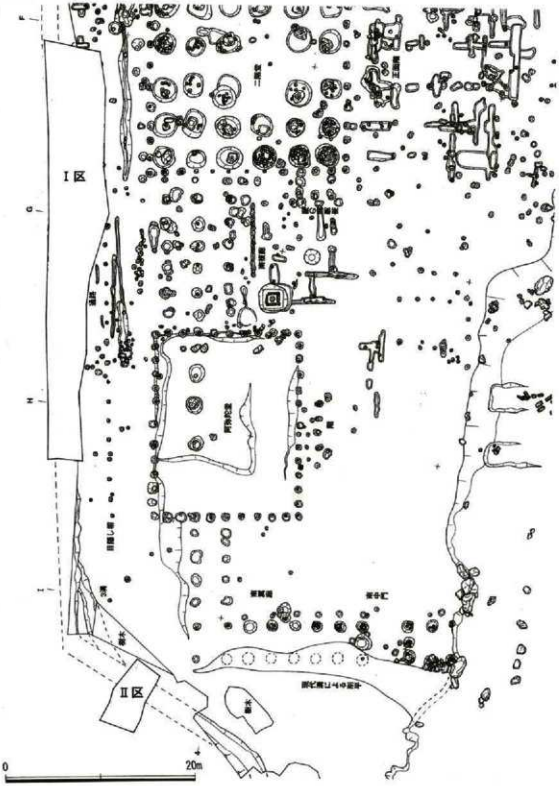


図4　調査地点位置図

第２節　調査経緯

本年度の発掘調査は、史跡永福寺跡整備委員会及び文化庁、神奈川県教育委員会の指導と助言に基づき、整備地区内に残っていた未発掘調査部分について、整備に必要な遺構の情報を得るために行った。

三堂裏の施設の状況を確認すると共に、過去の調査で検出されていた遺構とのつながりを確認し、また、西側切岸の状況を確認することが主な目的である。

発掘調査は、平成 19 年 11 月 29 日付 19 委庁財第４の 1511 号により現状変更の許可を受け、平成 20 年２月１日から３月 28 日まで実施した。

調査区は整備範囲西側の崖面に接して２箇所設定した。二階堂・阿弥陀堂・南複廊の裏側にあたる部分がⅠ区、南翼廊肩の裏側がⅡ区である（図４）。

調査地点は、現地表面から最大で約６m上方まで、切岸に沿って斜めに崩落土が堆積している状況であった。また、過去の発掘調査成果から、当該地では平均して現地表下１mほどが近代以降の堆積土であることが確認できていたため、崩落土と表土の掘削については調査担当者立会のもと重機を用いて行った。

表土掘削の後は、適宜調査区内に土層観察用のベルトを残しながら慎重に掘削を行い、遺構・遺物の記録を行っている。遺構については断面図と平面図を作成し、それぞれ対応する写真を撮影し、記録した。遺物については、必要に応じて出土状況の図面・写真をとりながら、遺構・出土層位ごとに取り上げを行った。一部は、出土位置を三次元的に記録している。これらの記録には、主として光波測距儀（SOKKIA 製）を用いた。

調査終了後に調査区は全て埋め戻しを行っているが、遺構の保護をはかるため、検出した遺構面から 30cm の厚さで山砂を敷き、その上から表土掘削と調査によって発生した土砂を埋め戻した。余分は場外へ搬出した。

この間、２月 19 日に史跡永福寺跡整備委員会を開催し、現地での視察を行うと共に、現場での指導を受けている。また、３月 22 日には一般向けに現地説明会を開催し、220 名を超える参加者を得た。

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　土層堆積状況（図５）

（1）Ⅰ区

ａ．北壁セクション（Ⅰ-Ａ区）

表土１．崩落土（耕作土）。

表土２．灰色粘質土層（旧耕作土）富士山宝永４年（1707）噴火のスコリアが混じる。壁際にはスコリアのブロックが見られる。溝Ａは表土２から掘り込まれている。

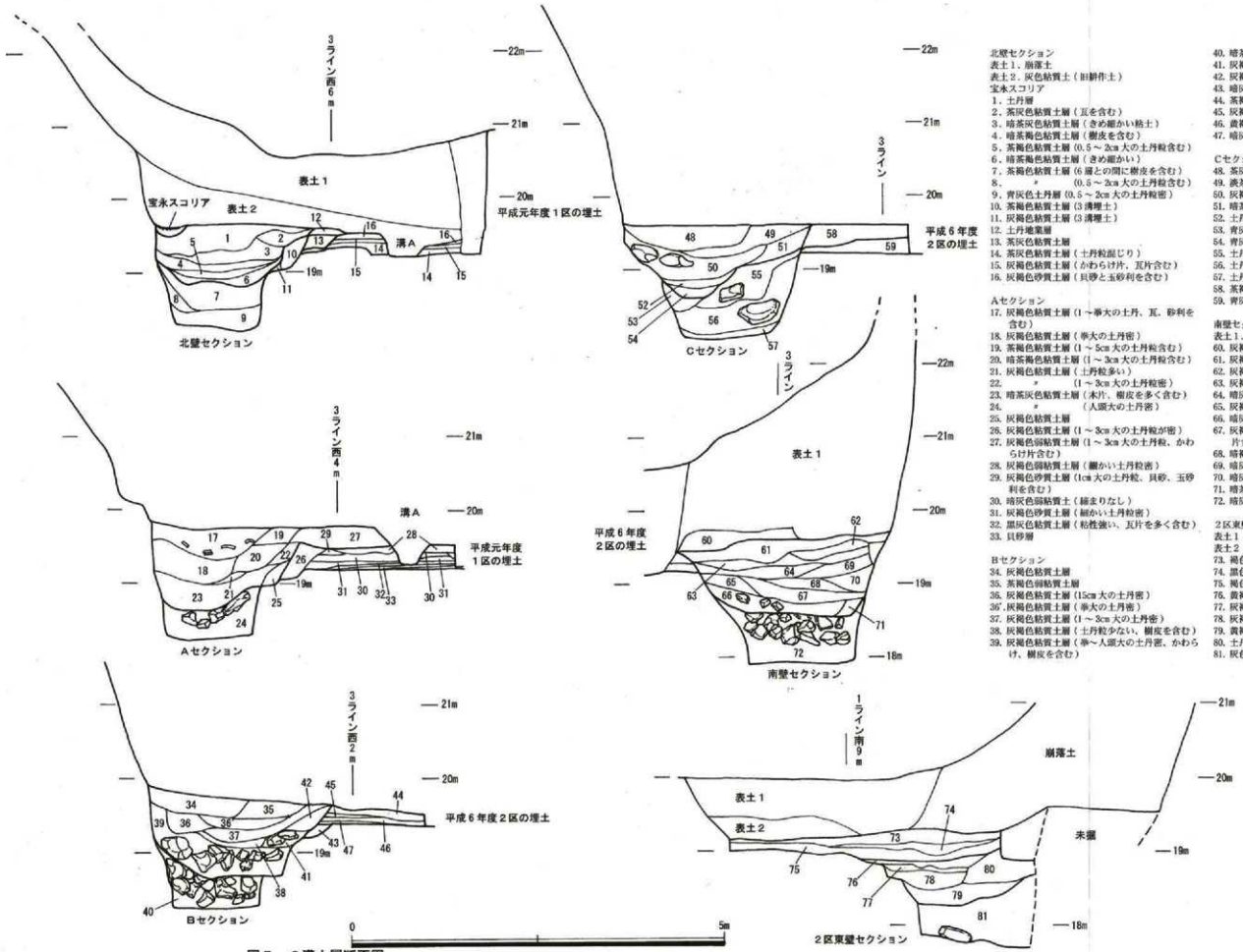
１層．２溝埋没後の山際水路の堆積土。

２～６層．２溝上層堆積土。１～６層は、褐色の粘土層、10・11 層は粘質土層である。５層は径 0.5～２ cm 大の土丹塊を多く含む。溝の使用時には溝の維持のため竣渫や改修が行われたと考えられる。10・11 層は２溝開削のために削られた３溝の覆土の可能性が考えられる。４層からは瓦が多く出土しているほか、６層と７層の間からは、檜と思われる薄い樹皮が大量に出土している。

７～９層．２溝下層堆積土。７・８層は茶褐色粘土層で、いずれも木材や樹皮を多く含んでいる。溝底の堆積土と考えられよう。９は土丹小塊を主体とする。

12 層．土丹地業層。

13 層．茶褐色粘質土層。12・13 層は３溝の肩の一部と考えられる。



北壁セクション
表土1．崩落土
表土2．灰色粘質土（田耕作土）
宝永スコリア
1．土丹層
2．茶灰色粘質土層（瓦を含む）
3．暗茶灰色粘質土層（きめ細かい粘土）
4．暗茶褐色粘質土層（樹皮を含む）
5．茶褐色粘質土層（0.5～2cm大の土丹粒含む）
6．暗茶褐色粘質土層（きめ細かい）
7．茶褐色粘質土層（6層との間に樹皮を含む）
8．〃　（0.5～2cm大の土丹粒含む）
9．青灰色土丹層（0.5～2cm大の土丹粒密）
10．茶褐色粘質土層（3溝埋土）
11．灰褐色粘質土層（3溝埋土）
12．土丹地業層
13．茶灰色粘質土層
14．茶灰色粘質土層（土丹粒混じり）
15．灰褐色粘質土層（かわらけ片、瓦片含む）
16．灰褐色砂質土層（貝殻と玉砂利を含む）

Aセクション
17．灰褐色粘質土層（1～拳大の土丹、瓦、砂利を含む）
18．灰褐色粘質土層（拳大の土丹密）
19．茶褐色粘質土層（1～5cm大の土丹粒含む）
20．暗茶褐色粘質土層（1～3cm大の土丹粒含む）
21．灰褐色粘質土層（土丹粒多い）
22．〃　（1～3cm大の土丹粒密）
23．暗茶灰色粘質土層（木片、樹皮を多く含む）
24．〃　（人頭大の土丹密）
25．灰褐色粘質土層
26．灰褐色粘質土層（1～3cm大の土丹粒が密）
27．灰褐色弱粘質土層（1～3cm大の土丹粒、かわらけ片含む）
28．灰褐色弱粘質土層（細かい土丹粒密）
29．灰褐色砂質土層（1cm大の土丹粒、貝殻、玉砂利を含む）
30．暗灰色弱粘質土（締まりなし）
31．灰褐色砂質土層（細かい土丹粒密）
32．黒灰色粘質土層（粘性強い、瓦片を多く含む）
33．貝殻層

Bセクション
34．灰褐色粘質土層
35．茶褐色弱粘質土層
36．灰褐色粘質土層（15cm大の土丹密）
36'．灰褐色粘質土層（拳大の土丹密）
37．灰褐色粘質土層（1～3cm大の土丹密）
38．灰褐色粘質土層（土丹粒少ない、樹皮を含む）
39．灰褐色粘質土層（拳～人頭大の土丹密、かわらけ、樹皮を含む）
40．暗茶褐色弱粘質土層
41．灰褐色粘質土層（1～3cm大の土丹密）
42．灰褐色粘質土層（拳～人頭大の土丹密）
43．暗灰色砂質土層（1～3cm大の土丹粒、炭化物）
44．茶褐色粘質土層
45．灰褐色粘質土層（粘性が強い）
46．黄褐色粘質土層（細かい土丹が詰まる）
47．暗灰色粘質土層（粘性が強い）

Cセクション
48．茶灰色粘質土層
49．濃茶灰色粘質土層（2cm大の土丹密）
50．灰褐色粘質土層
51．暗茶褐色粘質土層（きめ細かい）
52．土丹層（2～5cm大の粗い粒）
53．青灰色粘質土層
54．青灰色粘質土層（人頭大の土丹密）
55．土丹層（拳～人頭大の土丹）
56．土丹層（人頭大の土丹密に詰まる）
57．土丹層（人頭大の土丹底面に詰まる）
58．茶褐色粘質土層（粘性が強い）
59．青灰色砂質土層（締まる、底部に貝殻）

南壁セクション
表土1．崩落土
60．灰褐色弱粘質土層
61．灰褐色粘質土層
62．灰褐色粘質土層（1～3cm大の土丹密）
63．灰褐色粘質土層（細かい土丹密）
64．暗灰褐色粘質土層（1～5cm大の土丹密）
65．灰褐色粘質土層（2～3cm大の土丹密）
66．暗灰褐色粘質土層（拳大の土丹密、樹皮を含む）
67．灰褐色粘質土層（1～5cm大の土丹多い、かわらけ片含む）
68．暗褐色粘質土層（2～3cm大の土丹密）
69．暗灰褐色粘質土層（1～3cm大の土丹少量含む）
70．暗灰色粘質土層（木片含む）
71．暗茶褐色粘質土層
72．暗灰褐色粘質土層（拳～人頭大の土丹密に詰まる）

2区東壁セクション
表土1
表土2
73．褐色粘質土層（2cm大の土丹を含む）
74．黒色粘質土層
75．褐色弱粘質土層
76．黄褐色粘質土層（5cm大の土丹密）
77．灰褐色粘質土層（木片を含む）
78．灰褐色粘質土層（10cm大の土丹と砂利が多い）
79．黄褐色砂質土層（締まりなし）
80．土丹層（20cm大の土丹密）
81．灰色粘質土層（人頭大の土丹多く含む）

図5　2溝土層断面図

14. 15・16 層はいずれも灰褐色の砂質土で、硬く締まっている。瓦片などを含む 16 層と、貝片を多く含む 15 層に分けられる。平成元年度調査で確認された、堂裏の版築層の土層と観察所見もほぼ同一であり、標高も一致する。

b. Aセクション（I-A区とI-B区の間）

17 ～ 21 層．2溝埋没後の山際水路の堆積土。

22・23・25 層．2溝上層堆積土。23 層から樹皮が多く出土している。

24 層．2溝下層堆積土。上部には多くの人頭大の土丹が密に堆積している。

26 層．灰褐色粘質土層で土丹粒で締まっていた。2溝改修時の層を作っていたと思われる。

28 ～ 33 層．弱粘質土と貝混じりの砂質土の地業層。堅く締まっている。

c. Bセクション（I-B区とI-C区の間）

34 ～ 37 層．2溝埋没後の山際水路の堆積土。

38・39・41・42 層．2溝上層堆積土。38 層と 39 層の間から樹皮が多く出土する

43 層．暗灰色砂質土層。地業面の下、埋め戻された 3 溝の肩の可能性あり。

44 ～ 47 層．粘性の強い灰褐色粘質土層や暗灰色粘質土層と細かな土丹の詰まった黄褐色粘質土層の地業層。

d. Cセクション（I-C区とI-D区の間）

48・49 層．2溝埋没後の山際水路の堆積土。

50 ～ 55 層．2溝上層堆積土。Aセクション、Bセクションで見られた樹皮は確認されていない。

56・57 層．2溝下層堆積土。人頭大の土丹が密に詰め込まれている。隙間に柔らかい粘質土が入り込んでいる。

e. 南壁セクション（I-E区）

表土1．崩落土。

60 層．旧耕作土。

61 ～ 64・69 層．2溝埋没後の水路の堆積土。

65 ～ 68・71 層．2溝上層堆積土。66 層・71 層は暗灰褐色・暗茶褐色の粘質土で、樹皮・木片などを多く含む。その上層は径 5 cm 程度までの土丹塊を含む粘質土が複雑に堆積している。何度も浚渫・改修が行われた状況と考えられる。

72 層．暗褐色粘質土。上層は大型土丹で埋め込まれ、隙間の粘質土は水分を多く含むため締まりは弱い。過去の調査において 2 溝の改修に伴う埋め土と考えられている層と同一であろう（鎌倉市教育委員会 2001『国指定史跡永福寺跡』）。

(2) II 区

a. 東壁セクション

崩落土．径 50cm までの土丹塊を主体とする層であり、南側斜面からの崩落土と考えられる。

表土1．耕作土

表土2．近代以降の堆積土である（旧耕作土）。

73 ～ 75 層．近世以降の堆積土。いずれも粘性があり、締りの強い土である。径 5 cm 程度までの土丹の小粒を含んでいる。この堆積が岩盤面を覆っていることから、この地点では中世の遺構面は残されていない。岩盤面を掘り込んだ 2 溝だけが検出された。

76 ～ 78 層．2溝最終の流路か、埋没後の近世水路の堆積土。木片を含む粘質土層。78 層の灰褐色粘質土層は拳大の土丹と砂利を多く含んでいる。

79・80 層．2溝上層堆積土。80 層は 20cm 大の土丹が密に詰まり埋められている。79 層は締まりのない黄褐色砂利層。

81 層．2溝下層堆積土。径 30cm までの大型土丹を主体とする層である。土丹の間を木片を多く含む粘質土、砂利が埋めている。

第２節　調査成果

（1）Ｉ区の調査（図６）

ａ．位置と面積

これまでの調査で明らかにされている二階堂・南複廊・阿弥陀堂の西側に位置する。この場所は各建物の裏手、背後を南北方向に延びる尾根筋の山際にあたる。国土座標（ 世界測地系 ）X=-74528.207 Y=-24175.821、X=-74527.808 Y=-24169.221、X=-74570.906 Y=-24162.122、X=-74570.007 Y=-24157.422 に囲まれた、南北約 45m、東西平均約 6.58mの調査区（Ｉ区 ）を設定した。細長い調査区のため、北側から約 10m置きに区切り（A・B・C・D・E）グリッドを設定した。

面積は 296.2 ㎡である。

ｂ．検出遺構（図７・８）

・溝Ａ

Ａ区東側で検出した。確認面はＩ区北壁セクション図における 16 層の上面である。暗褐色粘質土が帯状に検出されたため、遺構の存在が明らかになったものである。幅は最大で 60cm、確認面からの深さは 10cm である。覆土の状況、２溝の上層部分が掘り込まれている整地層（ 図５：14 ～ 16 層 ）を壊して作られていることから判断して、直接永福寺に関わる遺構ではないと考えられる。ただ、溝中から出土する遺物は瓦・かわらけなどであり、近世以降のものは出土していない。

・２溝

調査で明らかにされている二階堂・南複廊・阿弥陀堂の背後、二階堂木製基壇西辺から西に約 10m 離れた山裾で幅約２m、深さ 1.5m程岩盤を断面箱状に掘り抜いた溝を南北 45mに渡り検出した。検出した溝は状況から判断して、昭和 62 年度・平成元年度・平成４年度・平成６年度に検出確認した２溝である。この溝は山裾に衝立を立てたがごとく真っ直ぐに開削されていた。溝の堆積は大きく３時期に分類できた。１．開削時期の岩盤を掘り抜いた状態の時期（２溝下層 ）。２．溝底を泥岩を用いて約 50cm 程埋め立て、更に幅を広げた時期（２溝上層 ）。この時期の覆土から檜皮がまとまって出土している。３．浅く縮小し最上層部に宝永火山灰が乗っている時期。である。

また２溝に沿って昭和 62 年度・平成元年度・平成６年度に検出確認した創建期に伴う３溝は、今回の調査範囲内ではＡ区とＢ区の２溝肩付近で僅かに確認された。しかし、大部分は２溝の開削時に削平され失われたと考えられる。

・切岸

２溝壁面から直に立ち上がる崖面や壁面に残る鑿跡をを見ると、２溝開削時期に合わせて改めて崖面を掘削したと思われる。２溝の開削で失われてしまった３溝（ 創建期 ）の開削時に、切岸状に崖面を掘削したのかは不明なことが多い。しかし、堂背後の平坦な岩盤面（ 海抜 19.1 ～ 19.2m）の広がりを見ると、創建期に大規模な造成や削平が行われたことは明らかである。

・貝砂敷きの通路状遺構

調査区東壁から２溝との間で検出確認したもので、細かい貝殻混じりの砂が互層状に堆積していた。平成元年度調査時には、轍状の痕跡も見られることから堂背後、山際を南北方向に抜ける通路を想定したものである。細かい堆積が幾重にも見られることから、補修を重ねた痕跡と考えられる。

・柱穴列

２溝の肩に沿っておよそ２mの間隔で岩盤に穿たれた柱穴列である（ 図７：P2 ～ P9)。平成元年時の調査でも検出確認されている柱穴で、いずれも堂背後と溝に沿って確認されているものである。これらの柱穴列は建物の背後に巡らされた目隠し塀の基礎と考えられる。柱穴の確認は、粘質土を肩に貼り付け大きく改修する以前、岩盤を直接穿ち掘り込まれていることから、２溝開削時に併せて穿たれたものである。

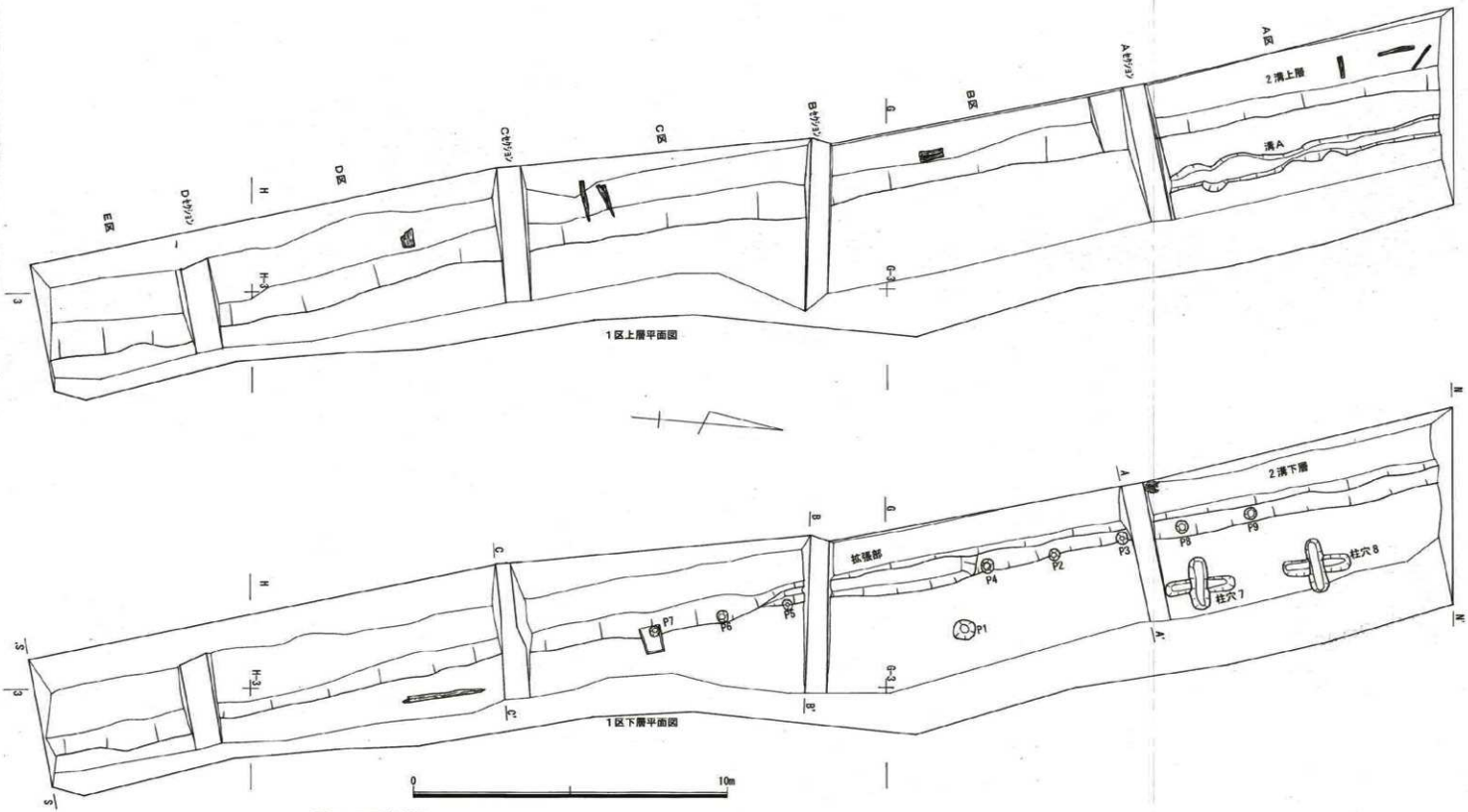

1区上層平面図
1区下層平面図
A区
B区
C区
D区
E区
2溝上層
溝A
2溝下層
拡張部
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
柱穴7
柱穴8
0
10m

図6　Ⅰ区全測図

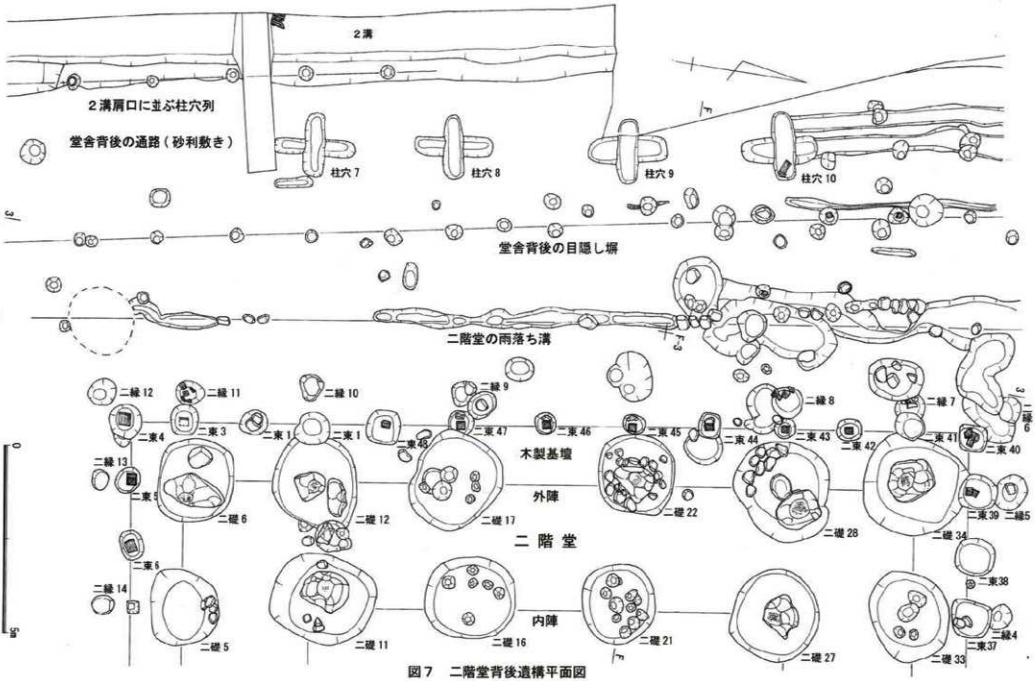


図7　二階堂背後遺構平面図

・二階堂背後の柱穴

調査区の北東部A・Bグリッドで平面十字形の柱穴を2穴検出した（図7：柱穴7・8)。平成元年時の調査で4穴の一部が確認されていたもので、当時の柱穴7・柱穴8にあたる。南北方向の長さ210cm、東西方向の長さ170cm、幅55～60cmの平面十字形の掘り込みで、交わる南北方向の掘り込みの深さが約40cm、東西方向の掘り込みの深さが約70cmと東西方向の掘り込みが一段深い。

平成元年と平成20年にかけて確認した平面十字形の掘り込みは計4ケ所3間分（12.4m）である。各柱間は南側の柱穴7・8間が3.65m、中央の柱穴8・9間が4.60m、北側の柱穴9・10間が4.15mである。およそ二階堂の内陣の柱を西に伸ばした延長線上に位置している。

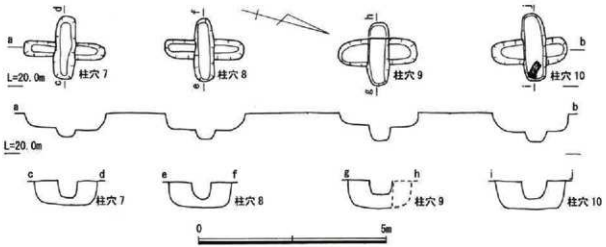


図8　十字形柱穴エレベーション図

c．出土遺物（図10～12、14～55）

包含層、遺構面、特に2溝中からは多くの瓦（永福寺Ⅰ期・Ⅱ期）とかわらけ、木片と少量の陶磁器類が出土している。檜皮と考えられる樹皮が2溝の中から多数出土している。堂以外の建物は檜皮葺の可能性も考えられよう。瓦類以外の遺物は、包含層、遺構面、遺構ごとに分けて版組をおこなった。瓦類は、これまでの長年にわたる調査で年代観が明らかになっていることから、出土地点・層位でなく瓦の種類ごとに分類し版組をおこなったものである。観察表に出土地点・層位は明記してある。また、瓦類の型式分類は、観察表を参照。

・Ⅰ区1面まで出土遺物（図10）

2溝上層確認面を1面とした。1・2はかわらけ小皿で13世紀前葉～後葉の製品である。3は13世紀末～14世紀代の製品、4は、削り出し高台で見込みと底裏にトチン痕のある17世紀の製品である。6は、高台無釉の初期伊万里碗底部である。

・Ⅰ区2面まで出土遺物（図10）

2溝東側の通路状遺構部分は貝砂敷き層（図5：15層）上面まで掘り下げ、第2面とした。1面以下2面までの出土遺物を図示した。7～13は軒桷成形のかわらけで、13世紀中葉～14世紀代の製品である。8は破断面も黒色である。14・15は手捏ねかわらけで、13世紀前葉～中葉の製品である。16は古瀬戸中Ⅲ期、14世紀中葉の製品である。

・Ⅰ－A区光波取り上げ遺物（図10）

A区では1面以下出土の遺物について、出土位置を三次元的に記録し取り上げた（後掲図56～59)。瓦以外の遺物を図10に示した。その他は図11以降で遺構・分類ごとに図示した。23・24は2溝上層

出土遺物で、13 世紀後半～ 14 世紀代の製品である。28 は脚部以外の内外面に施釉されているが、二次焼成を受けており元の色調は不明。削り出しの輪高台をもつ。17 ～ 22、27 は２溝下層出土。かわらけは薄手で深いタイプを含む。25 は３溝と思しき遺構から出土した。13 世紀後半の製品である。

・２溝上層（図 11）

出土するかわらけは、大小１点ずつの手捏ね成形品以外は轆轤成形品で、13 世紀後葉～ 14 世紀代のものである。同じく出土した常滑甕の口縁部片は常滑編年６ａ型式（13 世紀後半代）の年代が考えられる。同じく出土した漆器椀は、口縁部、底部ともに欠損しているが、木地ははごく薄く仕上げられているものである。全体が黒漆で塗られ、赤色漆で内外面に洲浜と植物が描かれている。

・２溝下層（図 12）

出土するかわらけに３点の手捏ね成形品が含まれる。いずれも 13 世紀前半代のもの。その他、轆轤成形品は 13 世紀中頃～後半代のものがみられる。常滑甕の口縁部片は常滑編年５型式（13 世紀中）のものである。他に白磁口兀皿、瀬戸折縁皿が出土している。

・瓦類

蓮華文鐙瓦（図 14）

４点出土している。Ⅰ期（創建期）の鐙瓦である。１だけが外区を巡る珠文数が 18 個（ＹＡⅠ01ｄ）、２～４が外区を巡る珠文が 24 個（ＹＡⅠ01ｅ）である。瓦当径、文様ともに似ている。

巴文鐙瓦（図 15・16）

５点出土している。図 15-１（ＹＡⅡ02ａ）と図 16-１（ＹＡⅡ02 不明）はⅠ期（創建期）の巴文鐙瓦。胎土は男瓦Ａ類。図 15-２（ＹＡⅡ05）と、図 16-２・３（ＹＡⅡ04ｂ）はⅡ期の巴文鐙瓦。図 15-２は中央に「竹管文」の押印、図 16-３は外縁に「目」の押印が見られる。胎土は男瓦Ｄ類。

寺銘鐙瓦（図 16-１）

１点（ＹＡⅡ02ａ）出土している。Ⅱ期の寺瓦である。外区内縁に珠文帯があり、その内側に「永福寺」の３文字を配したもの。胎土は男瓦Ｄ類。

その他の鐙瓦（16 ～ 18）

いずれも瓦当部が剥離および欠損しているもので、型式が不明のものである。図 16-５、図 17-１～３の胎土は男瓦Ａ類。図 17-４、図 18-１・２の胎土は男瓦Ｄ類。

唐草文宇瓦（図 19 ～ 24）

11 点出土している。Ⅰ期（創建期）の宇瓦である。図 19-１（ＹＮⅠ01ｂ）、図 20-１・２、図 21-１、図 22-１・２、図 23-１・２（ＹＮⅠ01ｄ）、図 24-１（ＹＮⅠ01ｋ）・図 24-３（ＹＮⅠ01 新）は瓦当部に均正唐草文、中心の端花文の左右に唐草文が巡る。胎土は女瓦Ａ類。図 24-３は唐草の巻きがこれまで知られていたものと異なることから新しい型式と考えられる。図 24-２（ＹＮⅠ03）は一回り小型のものである。瓦当部の中心に端花文はなく唐草文のみが配される。胎土は女瓦Ａ類。伊豆韮山、願成就院出土瓦と同笵である。

剣頭文宇瓦（図 25）

３点出土している。図 25-１（ＹＮⅡ03）はⅡ期の宇瓦である。瓦当部に大きな陽刻の下向き剣頭文が配されている。胎土は女瓦Ｃ類。埼玉県児玉郡水殿瓦窯産。図 25-２（ＹＮⅡ06）はⅢ期の宇瓦である。上向きの陽刻剣頭文が配されている。図 25-３（ＹＮⅡ新）はⅢ期の宇瓦である。上向きの陽刻剣頭文が配されている。剣頭文様はＹＮⅡ05 に似るが、脇区の隙間や剣頭の形状がこれまでに確認されているものとは異なり、新しい型式と考えられる。胎土は女瓦Ｅ類。

寺銘宇瓦（図 25）

２点出土している。図 25-４（ＹＮⅢ01ｂ）、図 25-５（ＹＮⅢ01ａ）はⅡ期の宇瓦である。瓦当部に「永福寺」の３文字を配している。胎土は女瓦Ｄ類。

その他の宇瓦（図 25・26）

いずれも瓦当部が剥離および欠損しているもので、型式が不明なものである。図 25-６、図 26-２の胎土は女瓦Ａ類。図 26-１の胎土は女瓦Ｃ類。

男瓦（図27・28）

Ⅰ期とⅡ期が含まれ規格も大きく精良な胎土のA類（図27、図28-1）、Ⅱ期の規格も大きく粗い胎土のB類（図28-2・4）、Ⅲ期の規格が小さく粗い胎土のD類（図28-3・5）

女瓦（図29～48）

Ⅰ期の精良な胎土のA類（図29～図38）とB類（図39）、Ⅱ期の水殿瓦窯産のC類（図39-6～図43）と粗い胎土のD類（図44～図48-2）、Ⅲ期の粗い胎土で規格が小さなE類（図48-3～5）が出土している。

鬼瓦・人名瓦・寺銘瓦・記号瓦（図49～55）

鬼瓦（図48-6）は1点のみ確認されている。小型のタイプで胎土はきめ細かな精良土をもちいていることから、Ⅰ期（YOⅠ不明）であると考えられる。人名瓦はⅠ期の女瓦A類に「宗清」（YMⅠ01a）「文長」（YMⅠ04a）の人名が押印されているものである。寺銘瓦はⅡ期の女瓦D類に「永福寺」（YMⅡ）の押印があるものである。記号瓦は女瓦D類（Ⅱ期）の端部に△（三角文）や○（竹管文）の記号を押印したものである。これまでに巴文鐙瓦の瓦当面中央や端部、男瓦の段部に、△・○・目といった記号が押されたものも確認されている。

（2）Ⅱ区の調査（図9）

a．位置と面積

阿弥陀堂から池に向かう南翼廊から約3m南西側に位置している。この場所は平成6年第2調査区と平成4年1区に挟まれている。南西側が尾根筋の山際にあたる。座標X=-74587.407 Y=-24148.423、X=-74588.407 Y=-24144.523、X=-74592.406 Y=-24149.423、X=-74593.207 Y=-24145.423に囲まれた南北約6.25m、東西約3.2mの調査区（Ⅱ区）を設定した。面積は20㎡である。

b．検出遺構

・2溝

Ⅰ区で検出した2溝をⅡ区でも検出確認することが出来た。山際を掘り抜いた溝の肩を東西約3m検出した。南北に長い2溝はⅡ区の手前でくの字に折れ曲がることは平成6年度の調査区で（平成6年度－2）で明らかにされていたが、改めて衝立を立てるようにくの字に折れ曲がることが明らかになった。当該調査区では、崩落に危険があるため、溝の東側半分のみを底まで掘削し西側半分は掘削せずに残した。検出した溝は状況から判断して、昭和62年度・平成元年度・平成4年度・平成6年度に検出確認した2溝である。

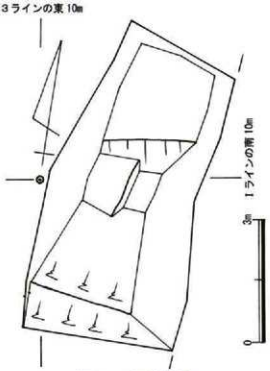


図9　Ⅱ区全測図

2溝に沿って昭和62年度・平成元年度・平成6年度に検出確認した3溝は、調査の範囲内では検出されていない。2溝の開削時に削平され失われたと考えられる。

・切岸

2溝の壁面から立ち上がる崖面を見ると、2溝開削時期に合わせて改めて崖面を掘削したと思われる。この2溝の開削で失われてしまった3溝が、開削時に切岸状に崖面を掘削していたのかは不明である。しかし、周辺に広がる平坦な岩盤面（海抜19.0m）の広がりを見ると、創建期に大規模な造成や削平が行われたことは明らかである。

c．出土遺物（図13・18・28・44）

Ⅱ区から、主に2溝内から瓦（永福寺Ⅱ期）と木片、少量のかわらけと陶磁器類、銭が出土している。

調査範囲も狭く、湧水が激ためにⅠ区のように上層、下層に分けて遺物を取り上げることが出来なかった。かわらけは小2点、大1点の計3点が出土している。いずれも轆轤成形品で灯明皿として使われたものもある。銭が7枚出土している。いずれも北宋のもので11世紀代に中国で作られたものばかりである。瓦類は鎧瓦（釘穴のみ）、男瓦、女瓦が各1点ずつ出土している。いずれも永福寺瓦類の男瓦B類、女瓦D類に分類される胎土の製品であり、寛元・宝治年間修理で使用され、弘安3年の火災に遭ったものである。

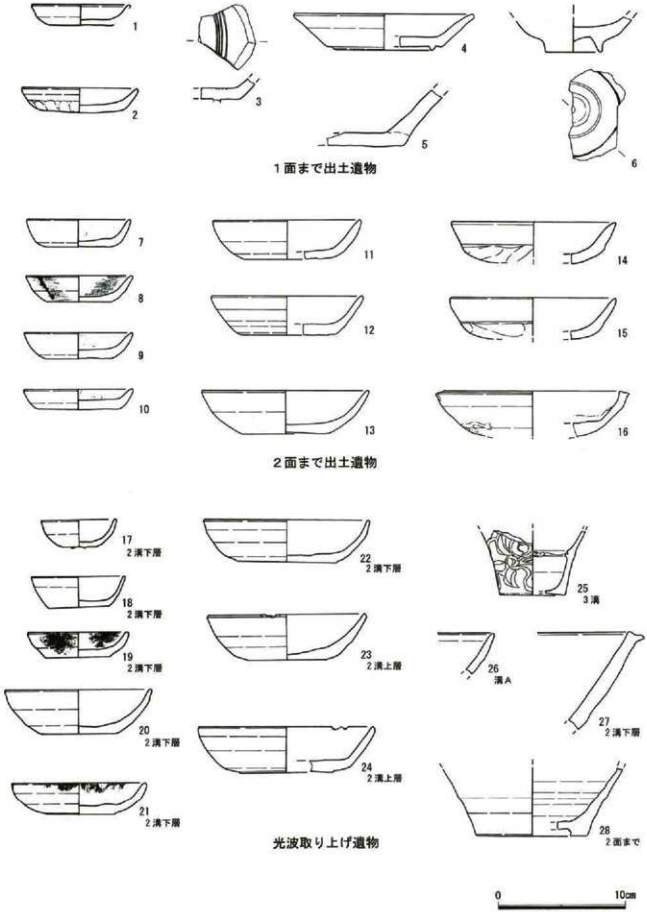


図10　Ⅰ区1面まで出土遺物・2面まで出土遺物・光波取り上げ遺物

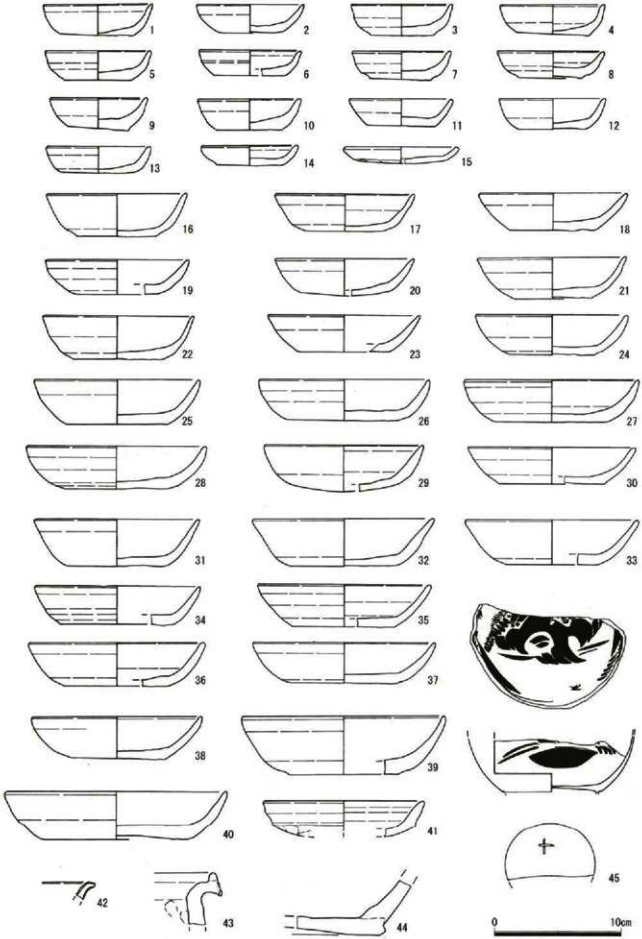


図11　Ⅰ区２溝上層出土遺物

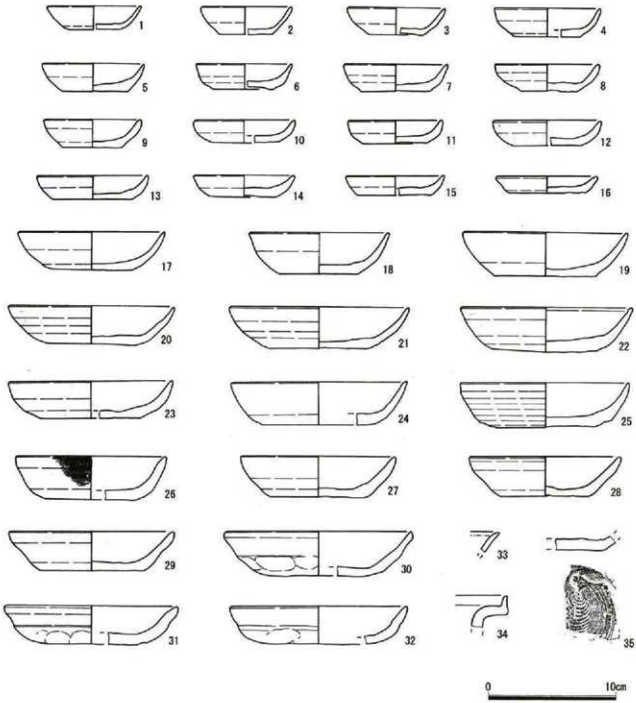


図12　Ⅰ区２溝下層出土遺物

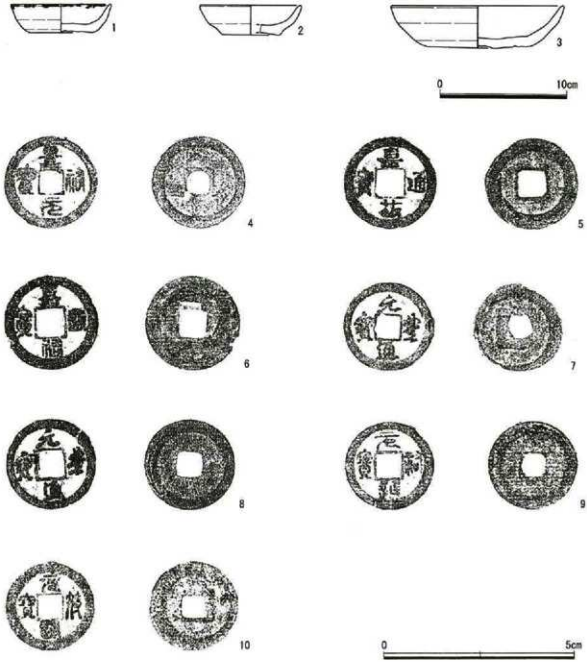


図13　Ⅱ区２溝出土遺物

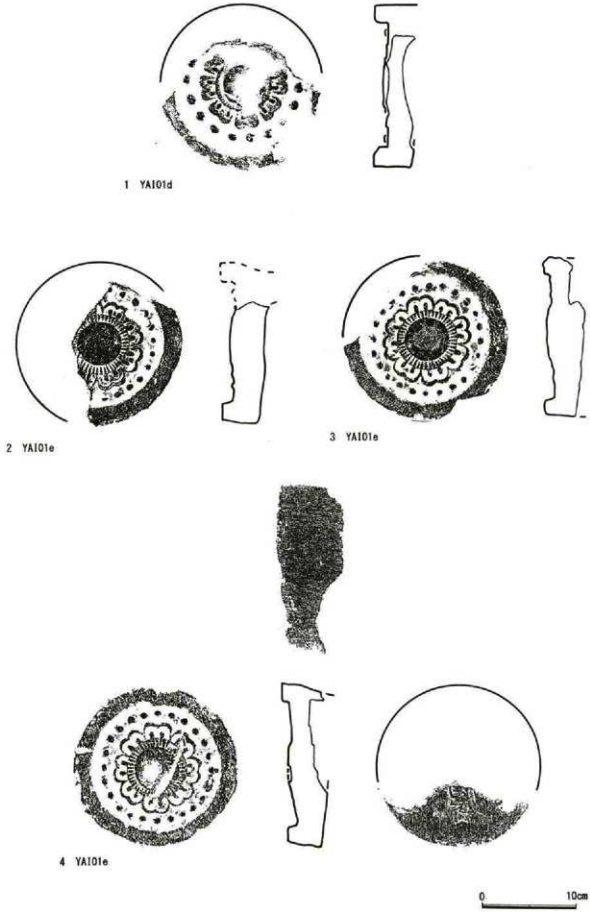


図14　蓮華文鐙瓦

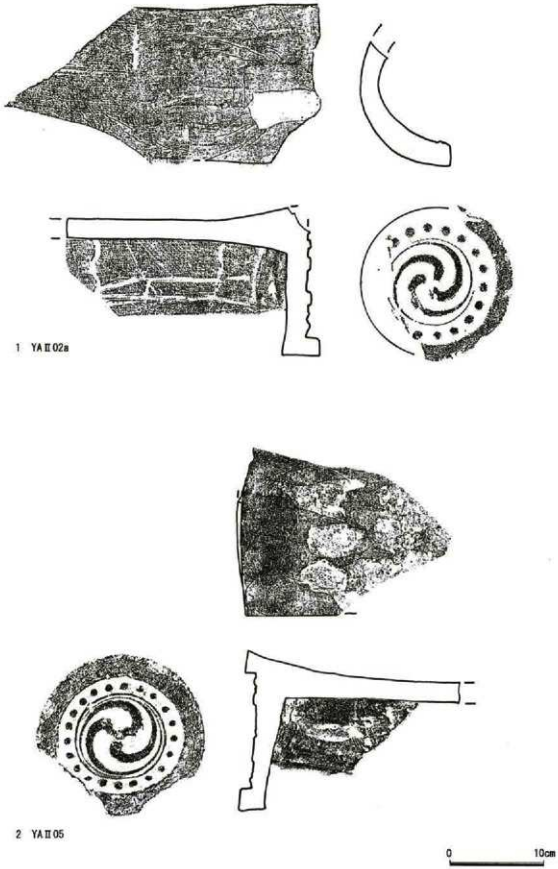
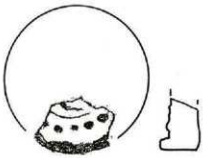
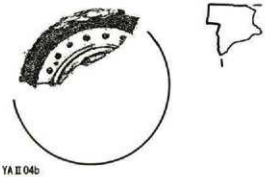


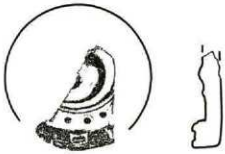
図15　巴文鐙瓦



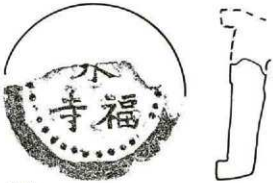
1 YAⅡ02



2 YAⅡ04b



3 YAⅡ04b



4 YAⅢ01a

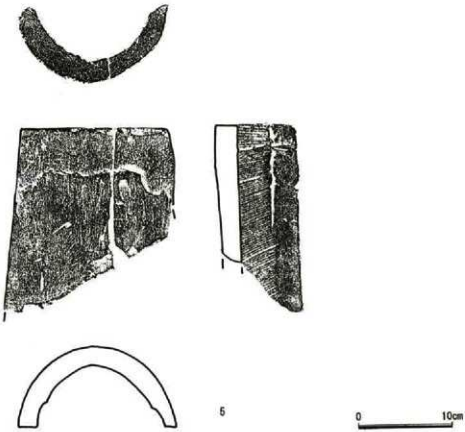


図16　巴文・寺銘・その他鐙瓦

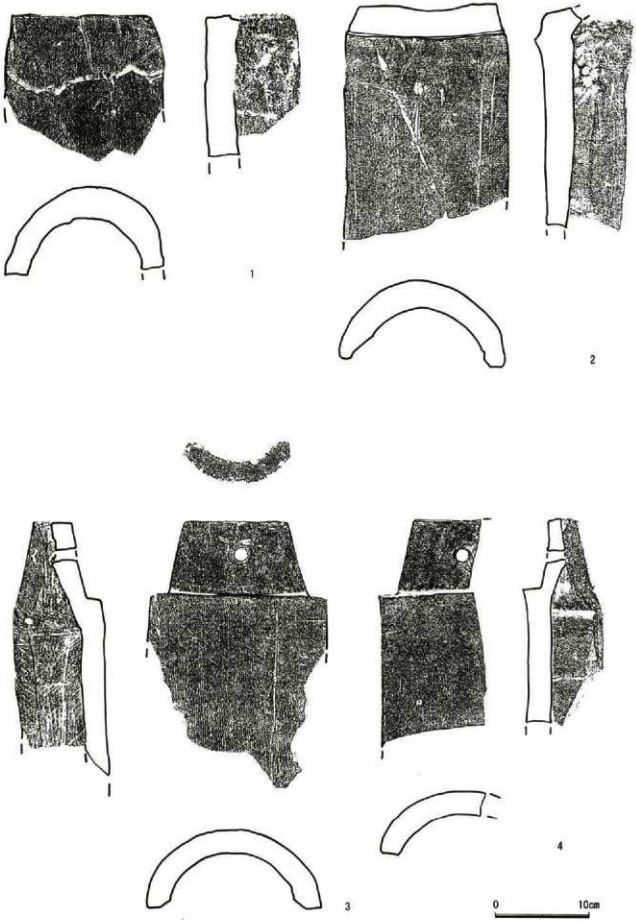


図 17　その他の鐙瓦

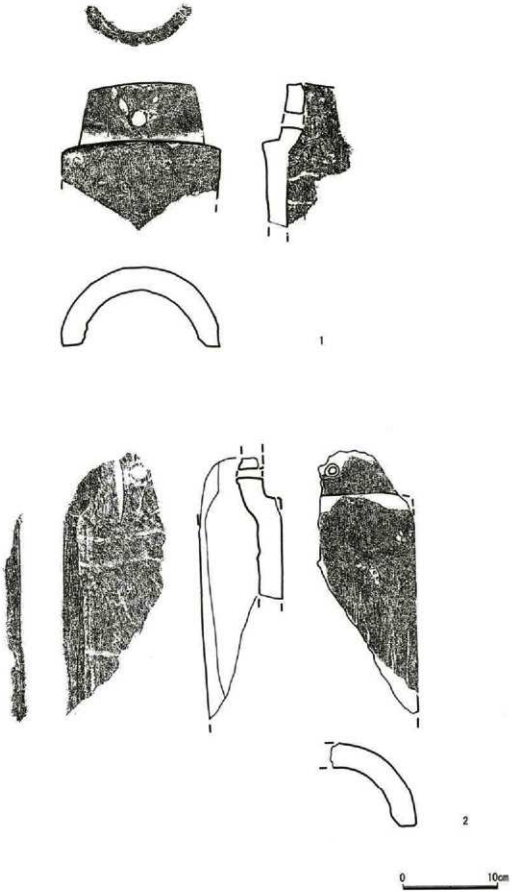


図 18　その他の鐙瓦

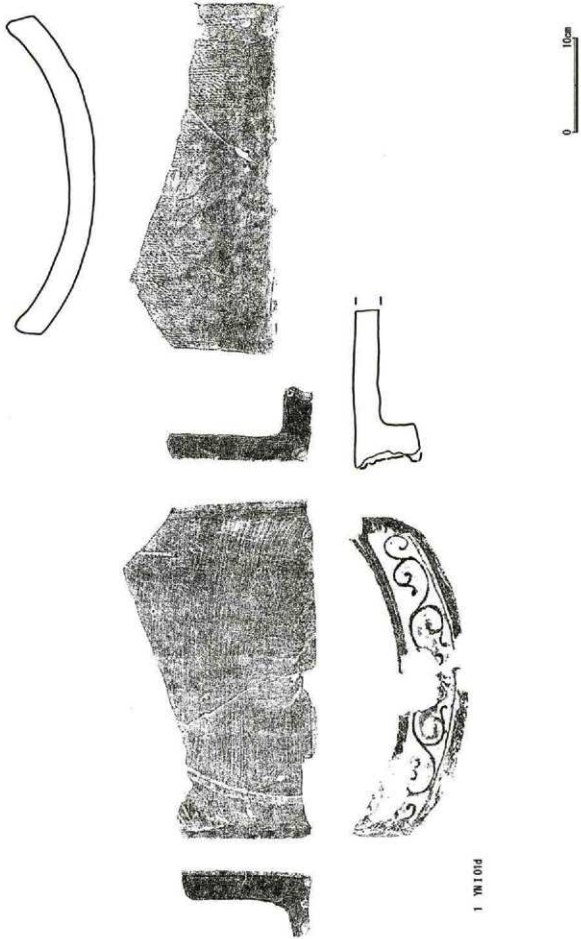


図 19　唐草文宇瓦

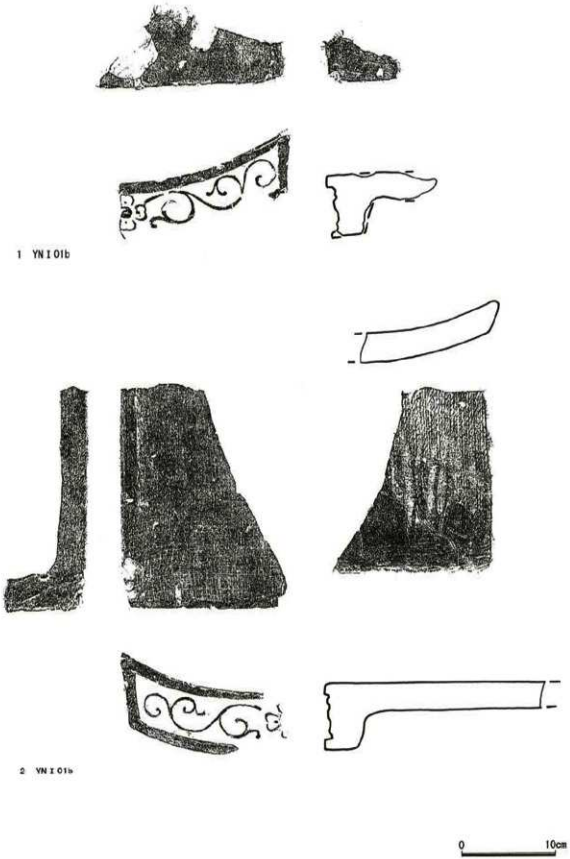


図 20　唐草文宇瓦

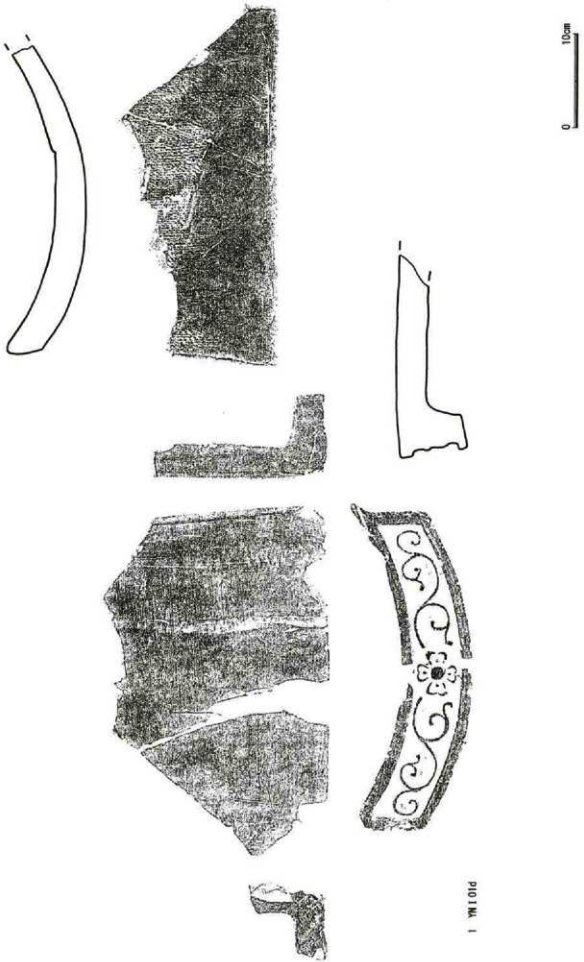


図 21　唐草文宇瓦

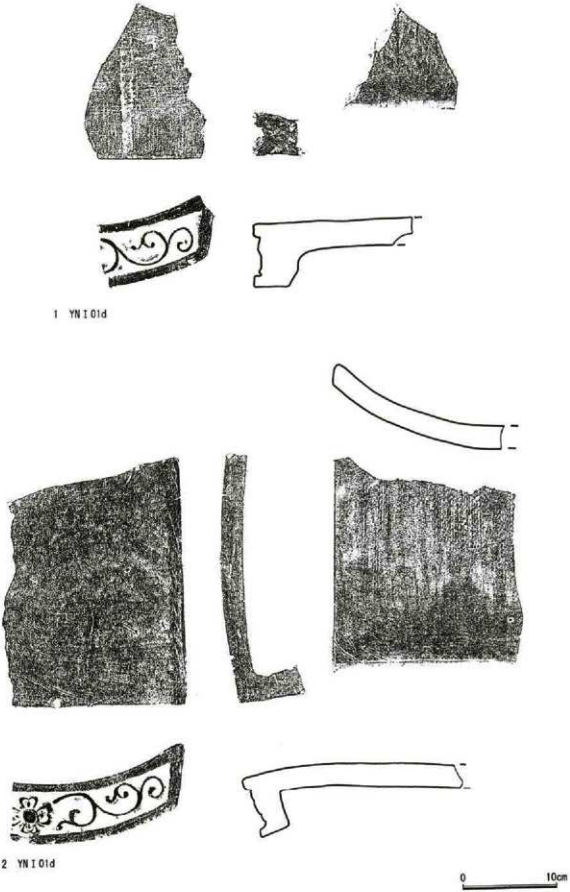


図 22　唐草文宇瓦

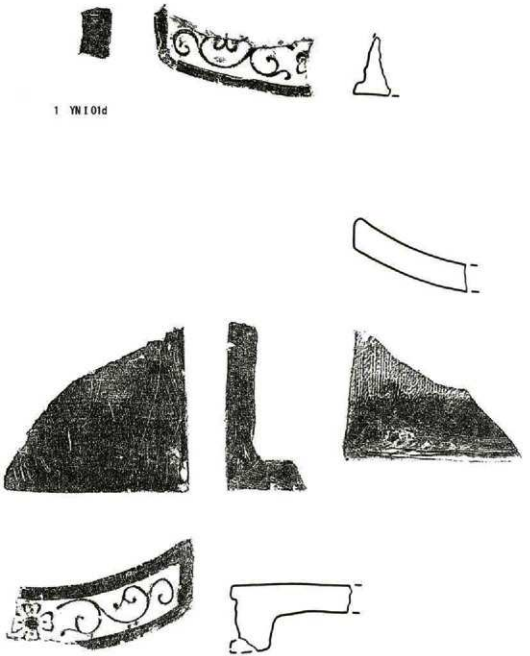
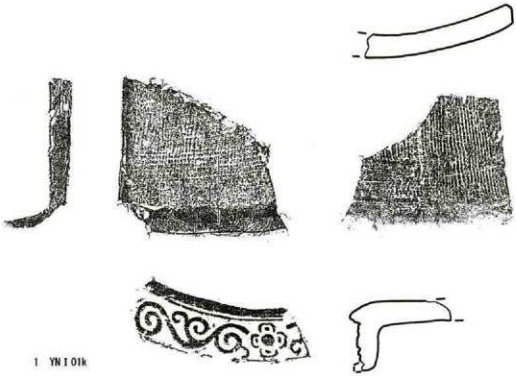
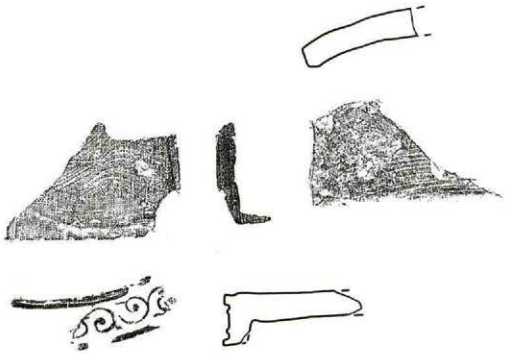


図 23　唐草文宇瓦



1 YNI01k



2 YNI03

3 YNI01新

図24 唐草文宇瓦

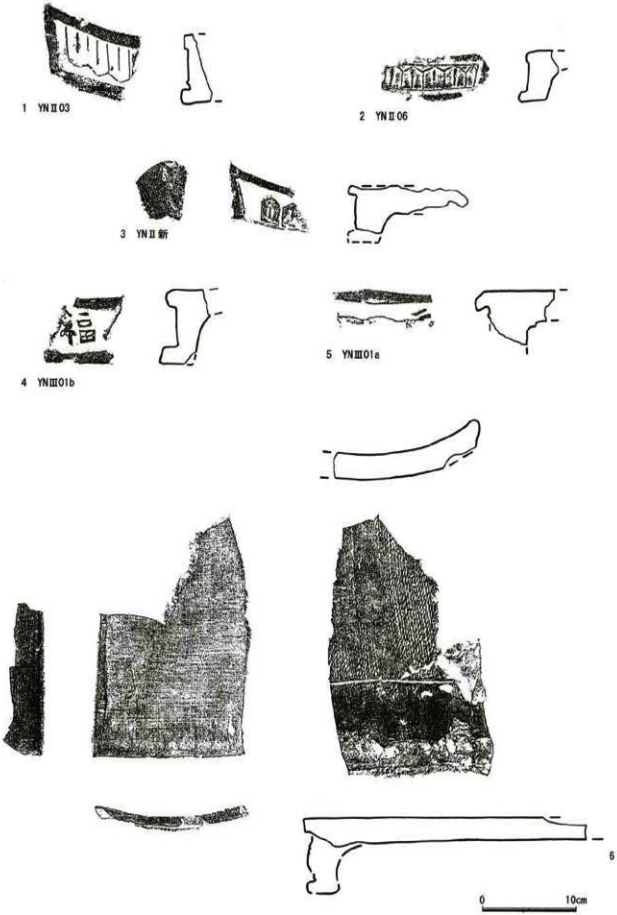


図 25　剣頭文・その他の宇瓦

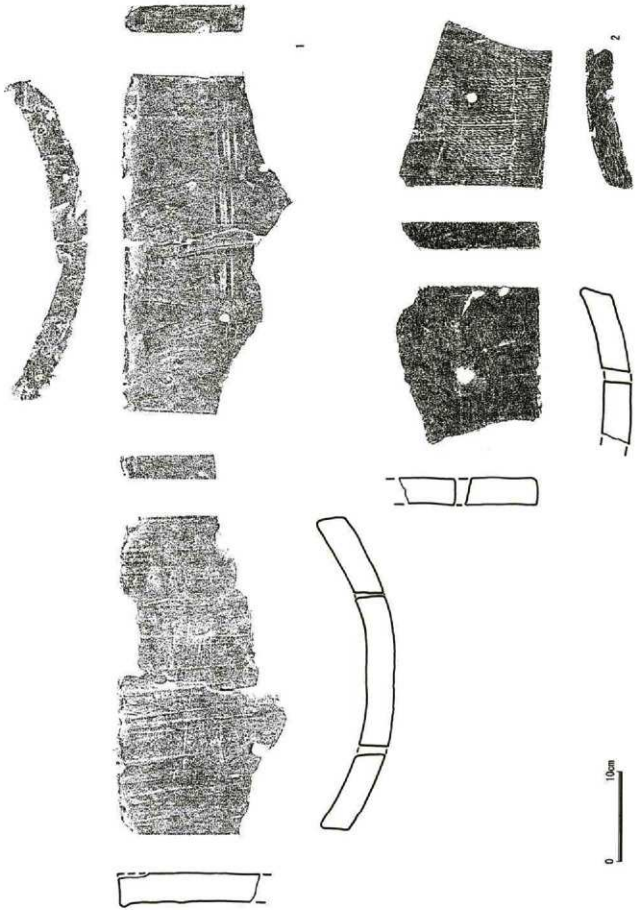


図 26　その他の宇瓦

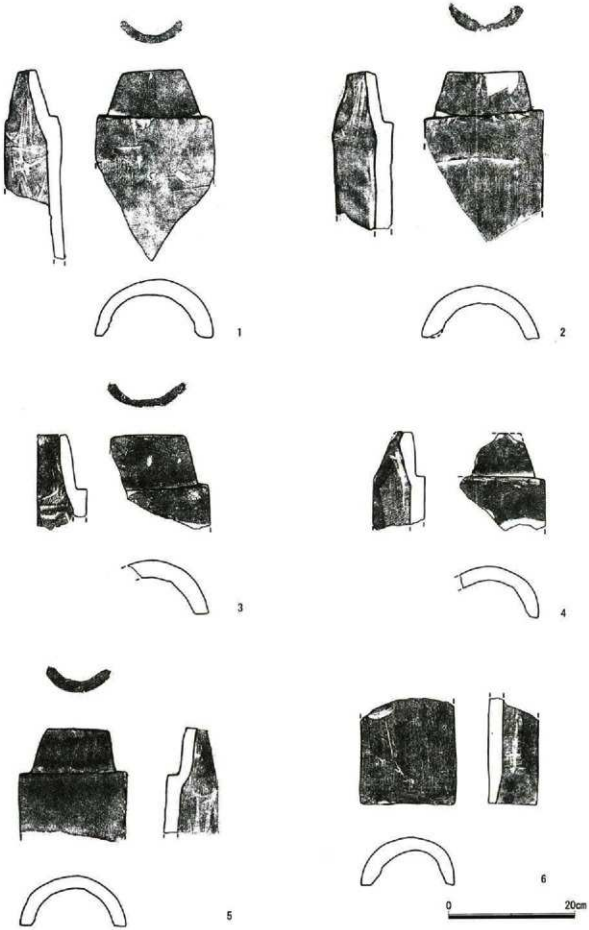


図27　男瓦A類

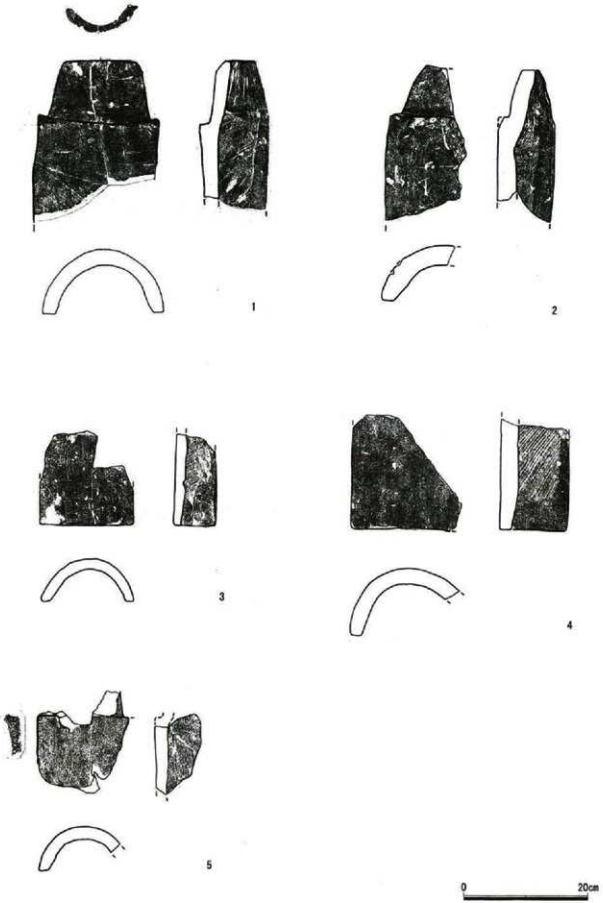


図 28　瓦B類・男瓦D類

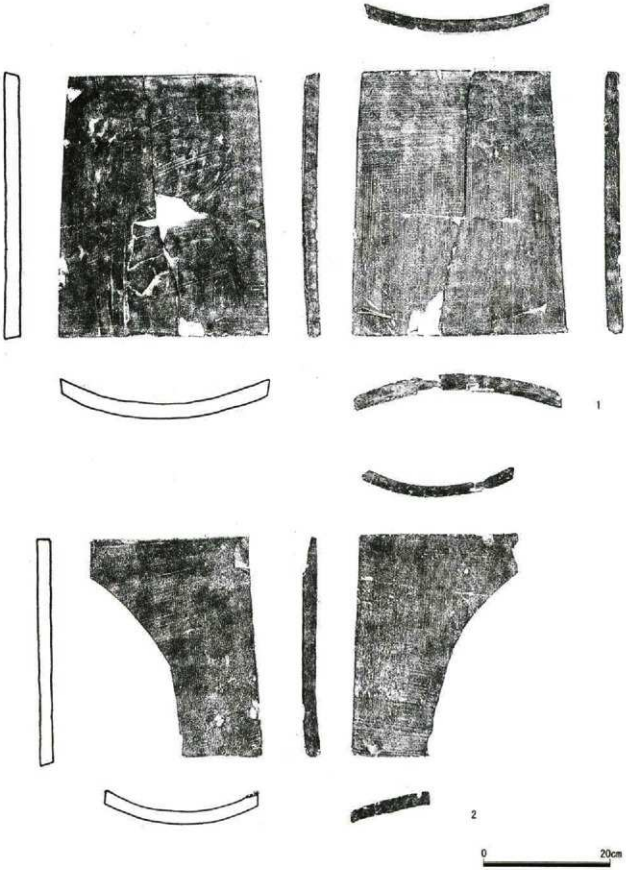


図 29　女瓦A類

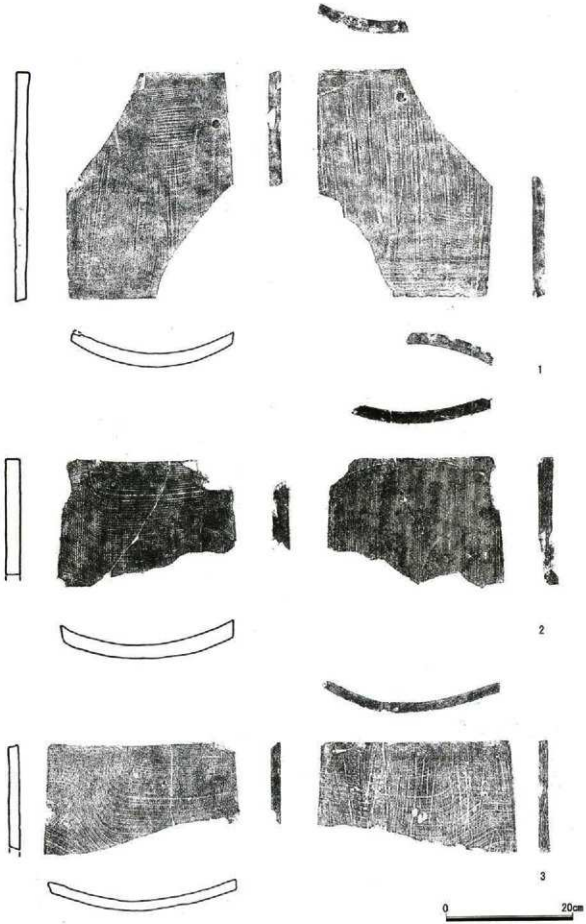


図30　女瓦A類

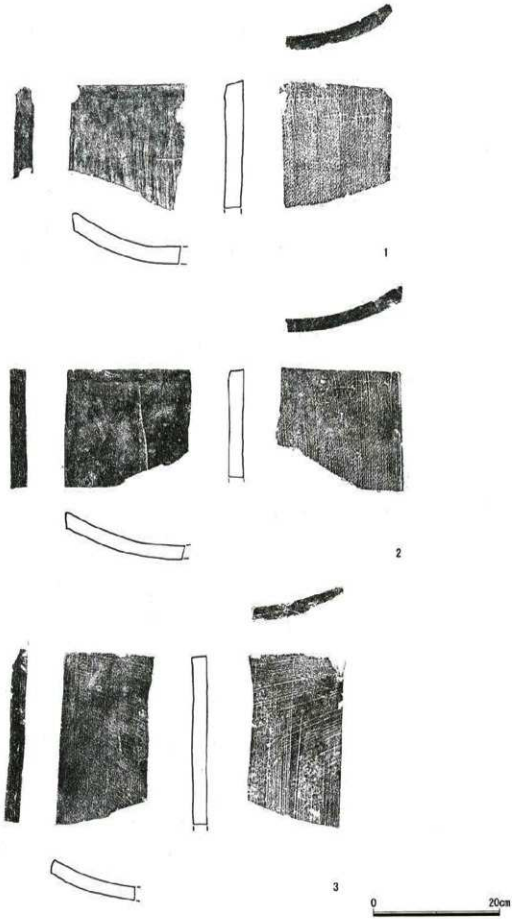


図31　女瓦A類

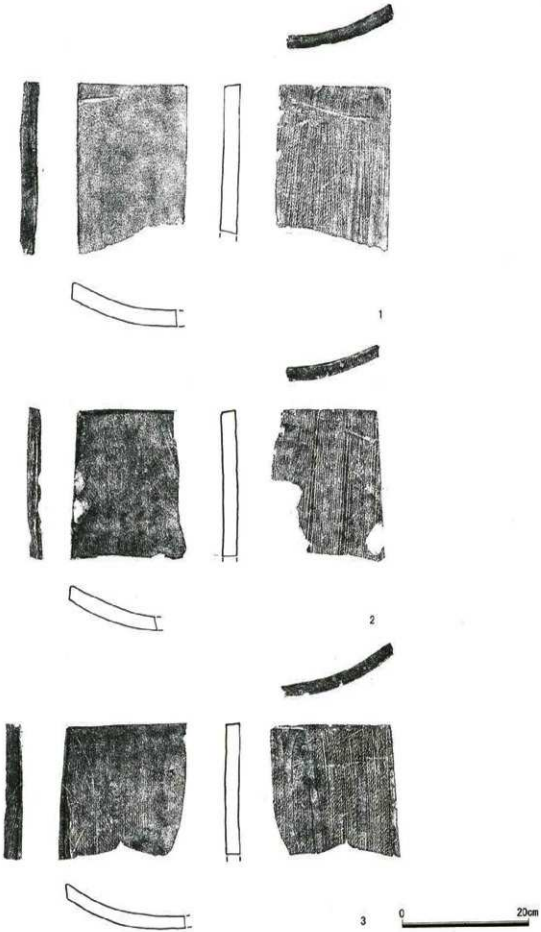


図 32　女瓦A類

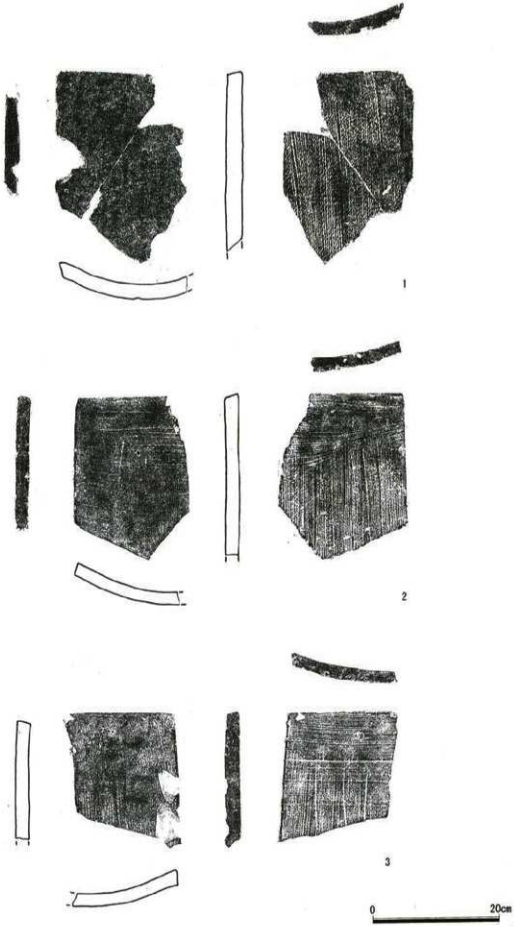


図33　女瓦A類

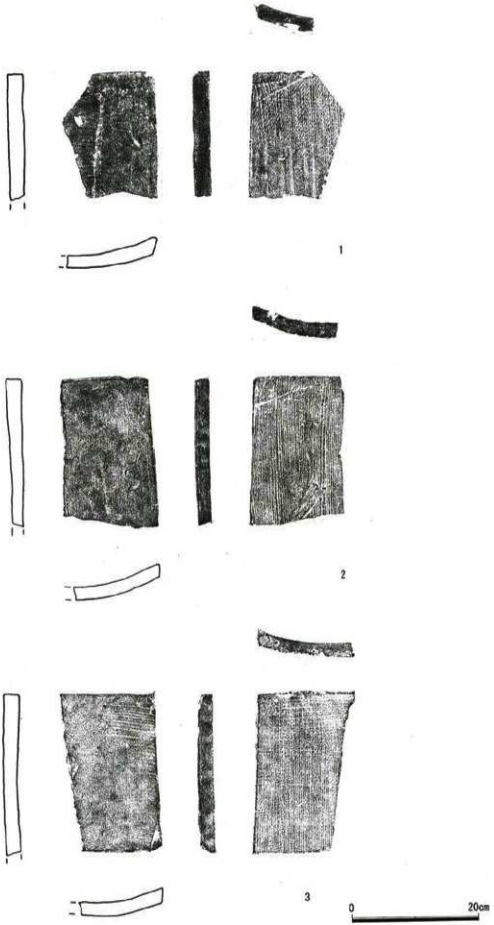


図34　女瓦A類

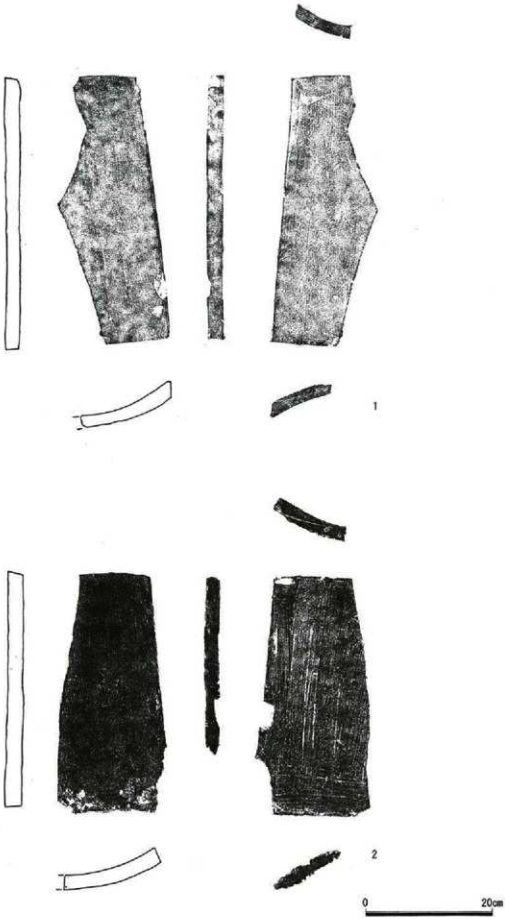


図35　女瓦A類

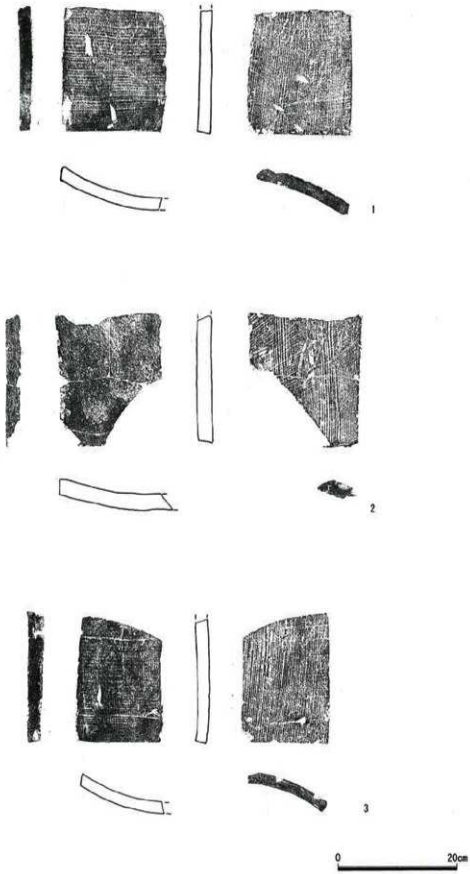


図 36　女瓦Ａ類

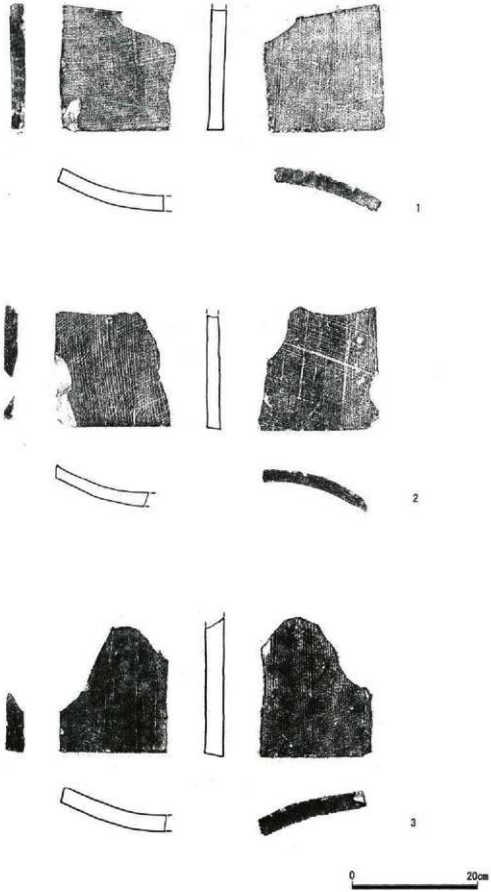


図 37　女瓦Ａ類

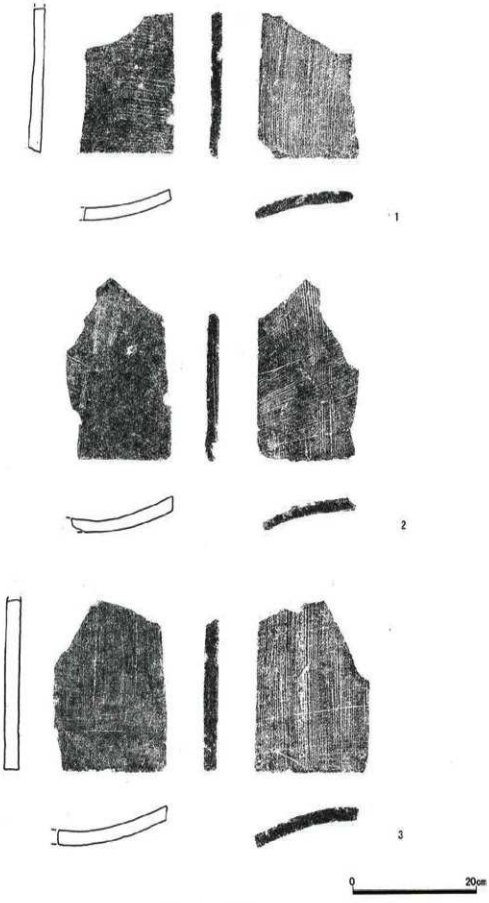


図38　女瓦A類

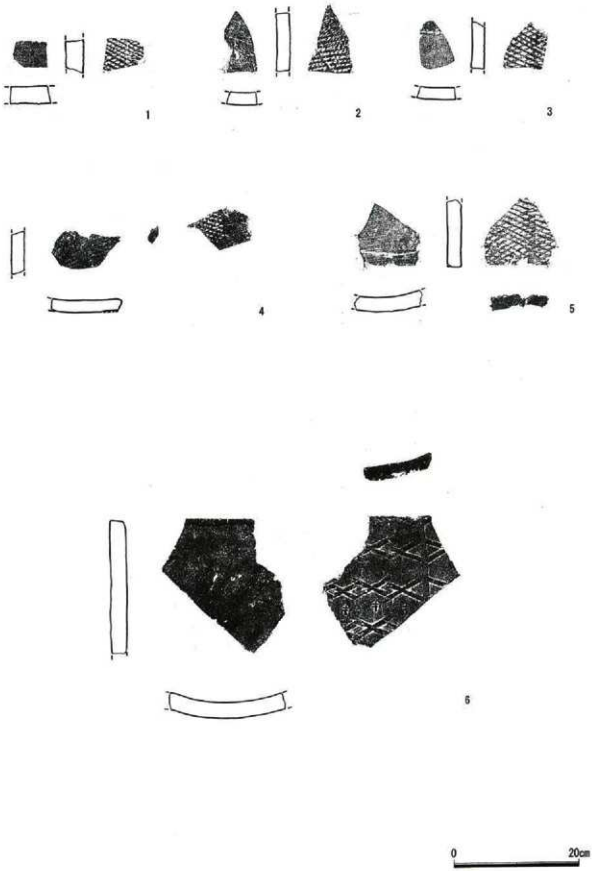


図 39　女瓦B類・女瓦C類

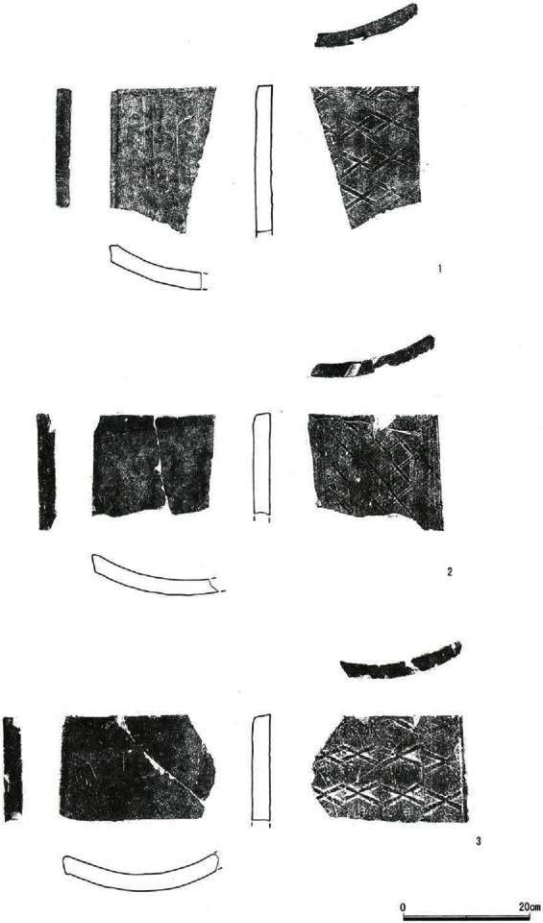


図40　女瓦C類

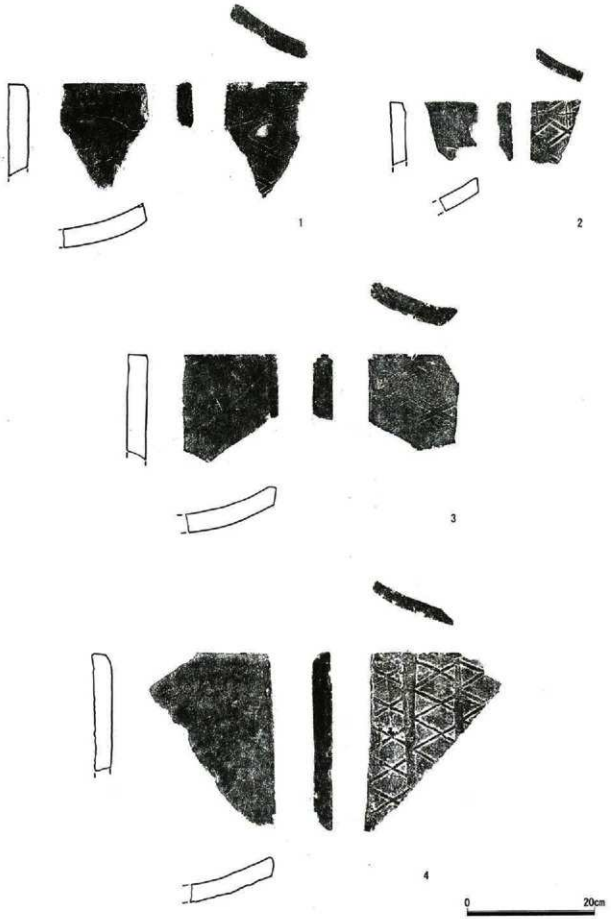


図41　女瓦C類

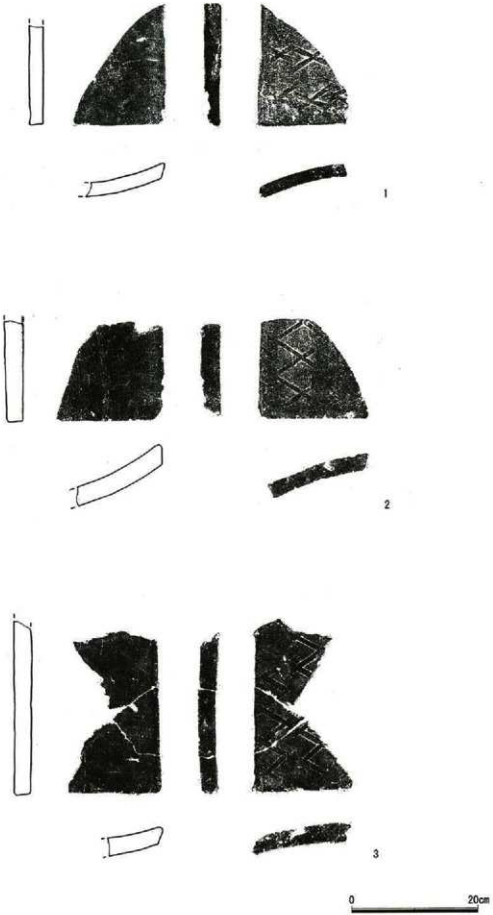
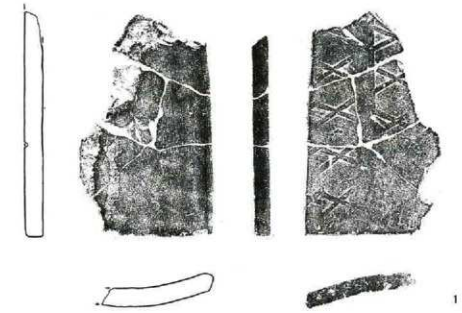
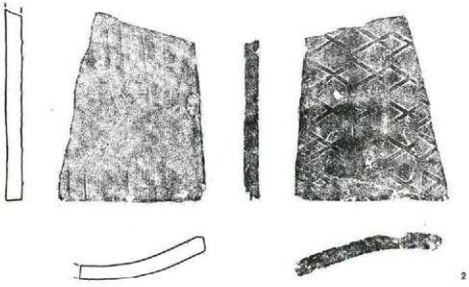


図 42　女瓦C類





0 20cm

図43　女瓦C類

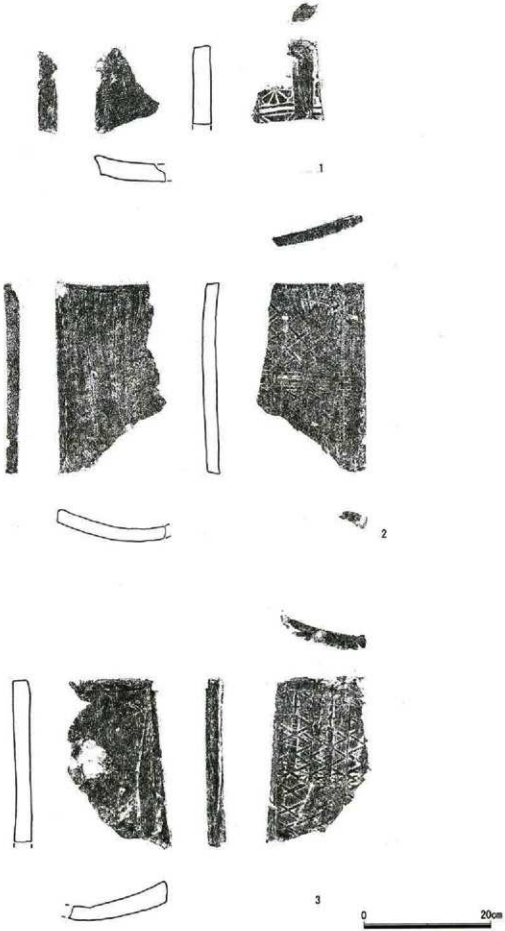


図44　女瓦D類

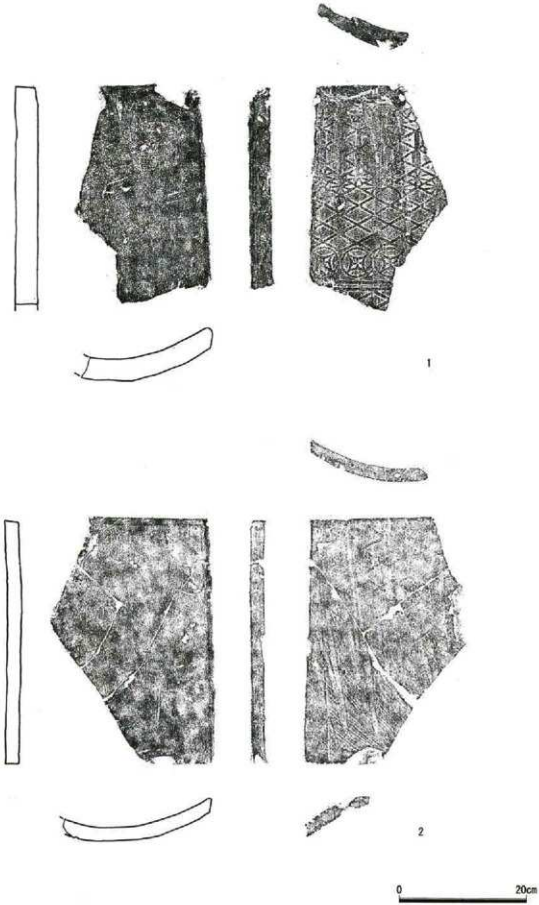


図45　女瓦D類

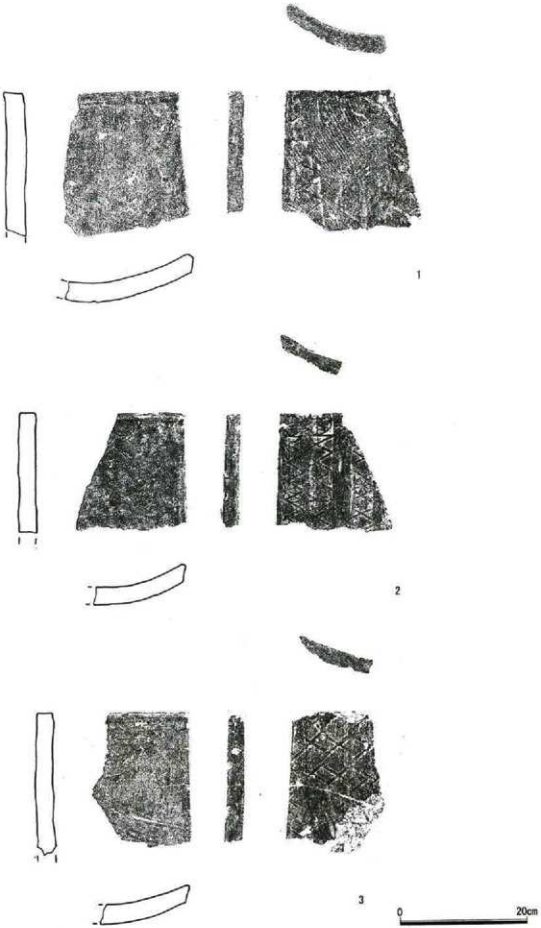


図46　女瓦D類

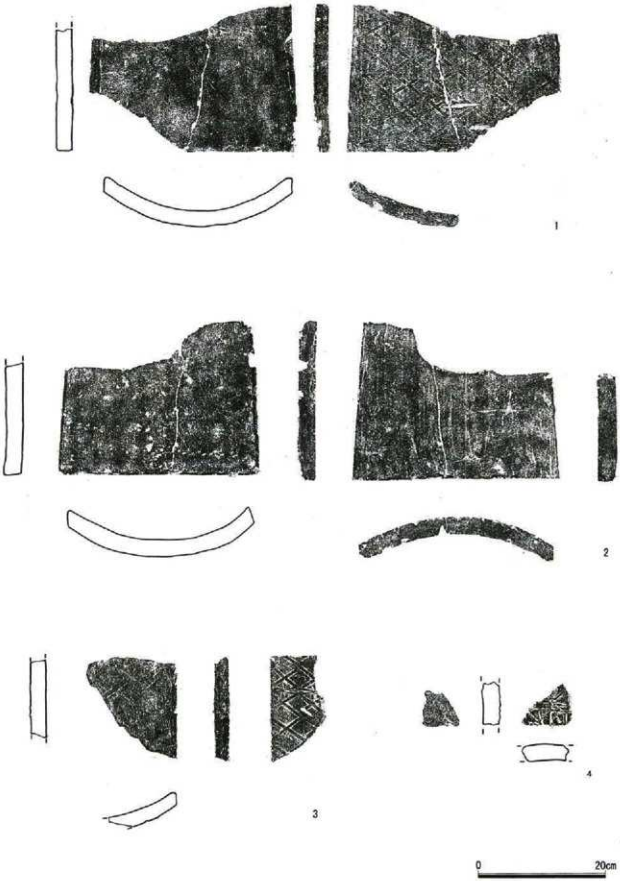


図47　女瓦D類

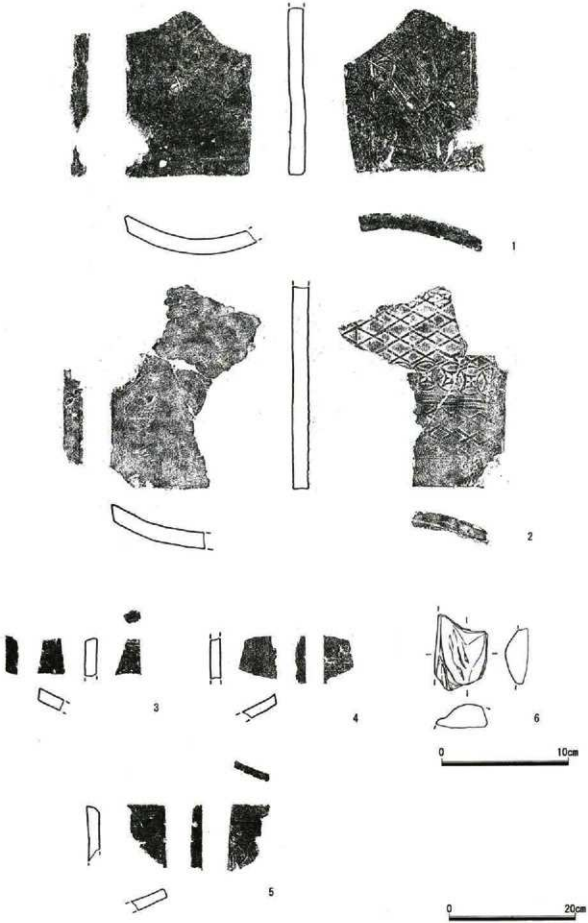


図48　女瓦D類・女瓦E類・鬼瓦

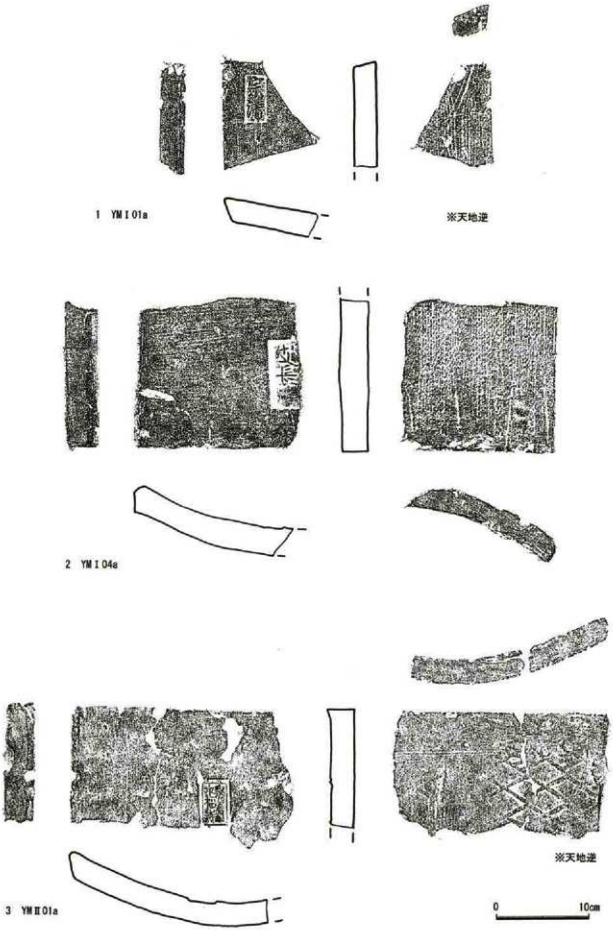


図49　人名・寺銘・押印文字瓦

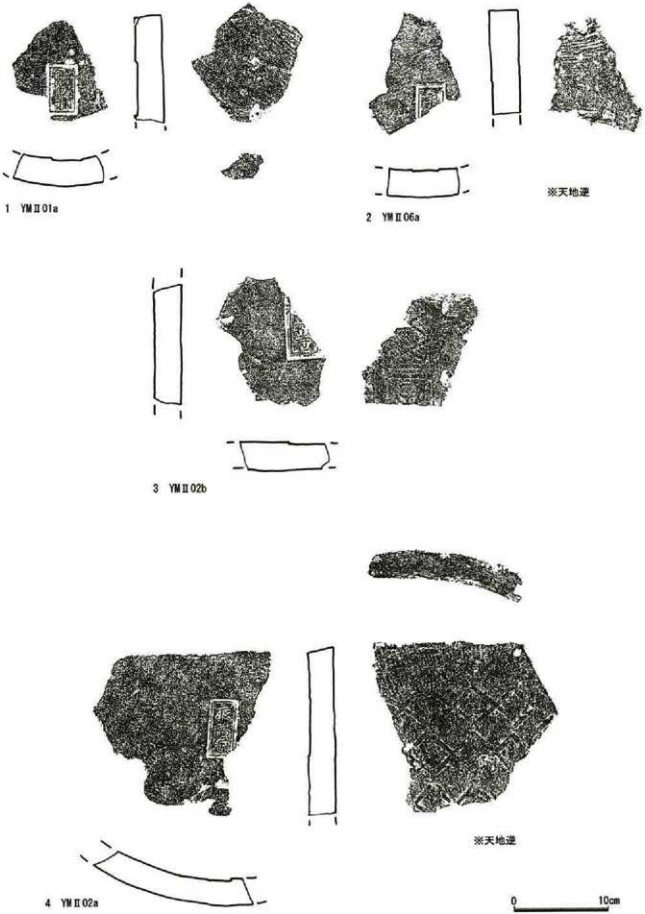


図 50　寺銘押印文字瓦

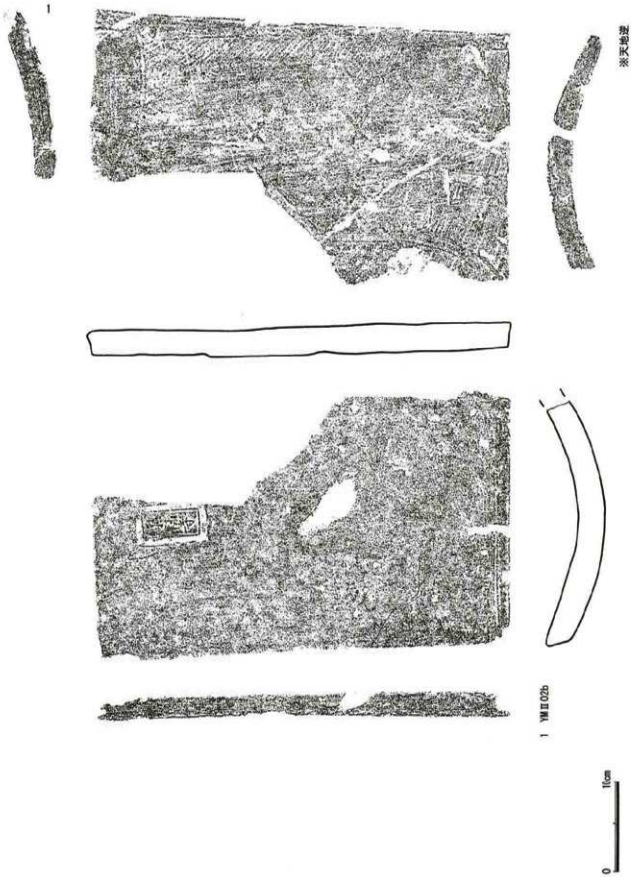
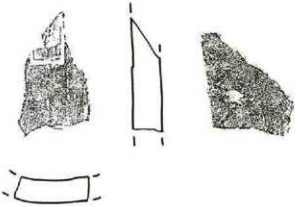
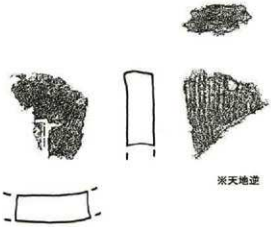


図 51　寺銘押印文字瓦

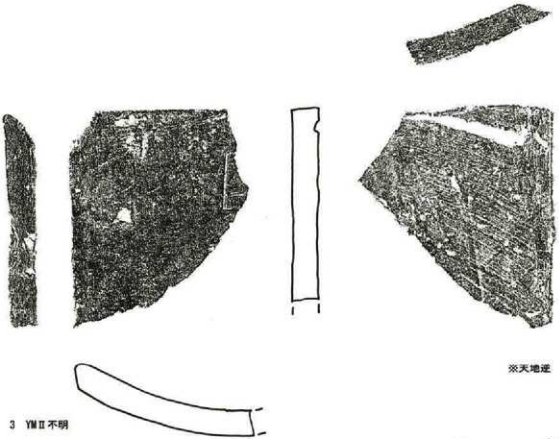


1 YMⅡ不明



※天地逆

2 YMⅡ不明



※天地逆

3 YMⅡ不明

0 10cm

図 52 寺銘押印文字瓦

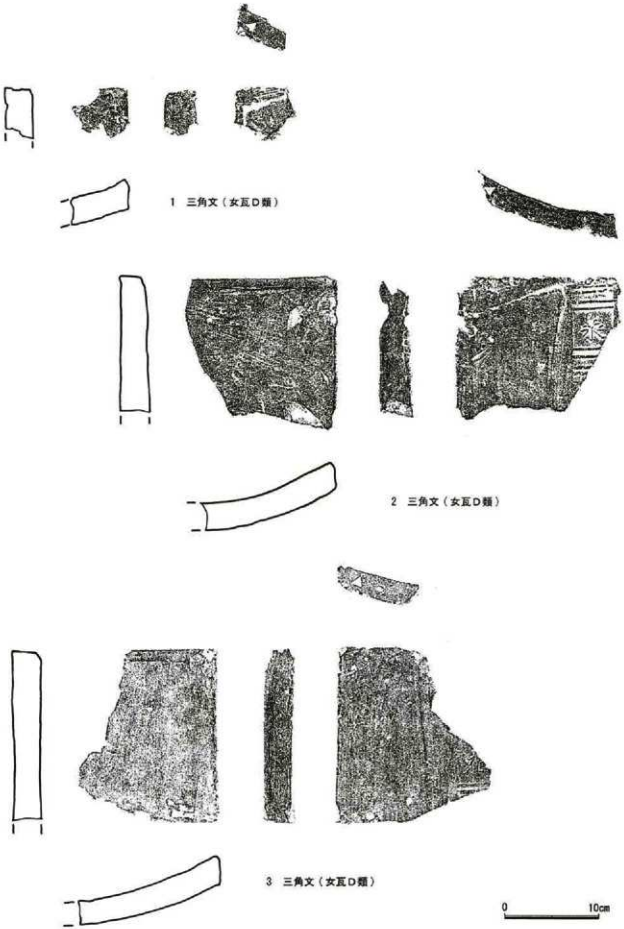


図53 記号瓦

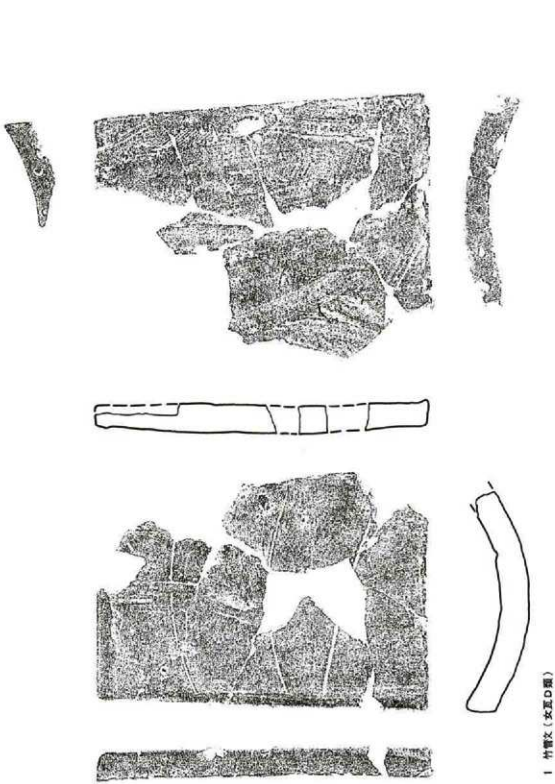


図54　記号瓦

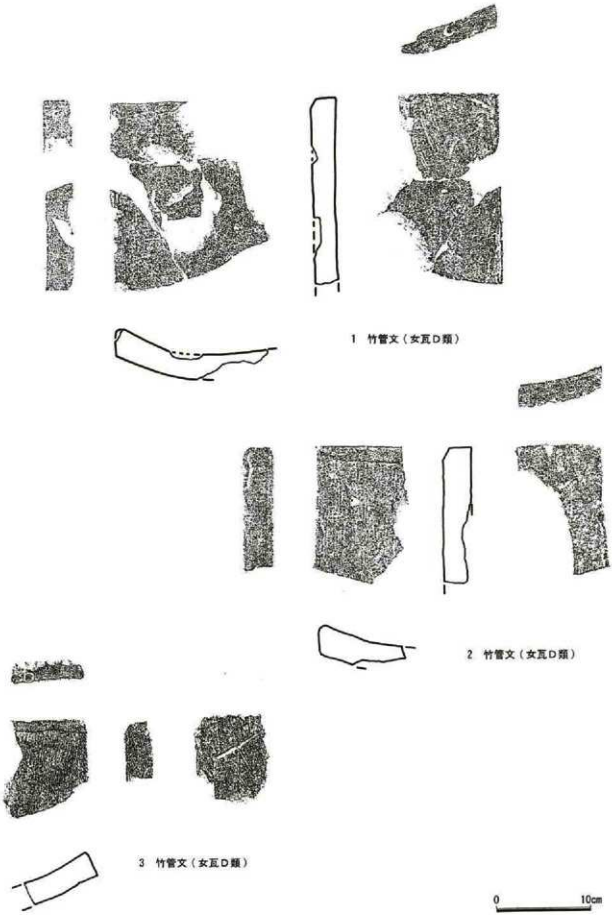


図55 記号瓦

第３節　Ⅰ－Ａ区の遺物出土状況

今回の調査では、Ａ区の出土遺物 641 点について、その出土位置を三次元的に記録した。以下、その出土状況について記す。

なお、今回の発掘調査で出土した瓦の総数は 2846 点、そのうちＡ区出土の瓦は 1152 点、さらに出土位置を記録したものは 543 点である。Ａ区出土瓦のうち、600 点あまりが一括遺物となってしまったことになる。正確な分布状況を示すに十分な数とは言えないかもしれないが、それを念頭においたうえで、概観することとしたい。

平面分布は２溝下層とＰ8・9、柱穴 7・8 の遺構図に重ねた。ただ、柱穴出土遺物は掘削時に位置の記録を取らなかったため、実測できた個体も出土しているものの、分布を図に反映することができなかった。

断面分布はＡセクション（図５参照）に投影した。しかしセクションライン図 56 ～ 59：A-B と２溝は厳密には直角に交わらないため、２溝出土の遺物は、出土位置が北のものほど投影したドットがセクション図の２溝断面ラインから東側へ外れてしまうことになった。そこで断面図には、北壁セクション（図５参照、図 56 ～ 59:A'-B'）における２溝の東側壁・底面ラインもあわせて投影した。図中破線（－－－）が２溝上層、一点鎖線（－･－･－）が２溝下層の掘方ラインである。

調査区東側の通路状遺構堆積土（図５:28 ～ 33 層）については、堆積層途中の貝砂層上面を２面とし（図 56「２面ライン」）、そこまでの調査にとどめた。しかし、十字柱穴とその周囲は遺構確認のために２面以下まで掘削し（写真図版６参照）、出土した遺物もその都度取り上げた。

図 56 には、Ａ区出土遺物全体の分布状況と、瓦以外の実測遺物の出土位置・接合関係を示した。

平面分布に大きな偏りはないが、溝のある調査区西側のほうが、若干密度は高いようである。東側は、十字柱穴確認時に出土した２面以下の遺物が、遺構に重なる位置に集中している。

断面分布をみると、遺物集中域が上部と下部に分かれ、その間に遺物のほとんど混入しない層が存在することがわかる（以下、「無遺物層」）。

上部の遺物集中は通路状遺構堆積土（図５：28 ～ 33 層）中の遺物と２溝上層覆土（図５：18・20 層）中の遺物によるものである。通路状遺構堆積土において２面ライン以下にある出土遺物は前述の十字柱穴確認時の遺物である。２面以下にも多くの遺物を含むことが想定できる。２溝上層覆土は土丹塊を多く含むが、後述するように実測個体も多く（図 57 ～ 59）、比較的残存状況の良い遺物が多量に混入することから、単に西側の切岸が崩落して埋まったのではなく、瓦など遺物の混在する土によって人為的な埋め立てが行われたと考えられる。

種類別の出土点数では、瓦（・）が最も多く、次いでかわらけ（○）、国産陶器（瀬戸△・常滑▲）の順となる（図 56）。しかし国産陶器は瀬戸産が２点（うち１点は実測遺物△10-26）、常滑産が３点（うち１点は実測遺物▲10-27）と非常に少ない。青磁・青白磁はそれぞれ☆10-28、★10-25 のみである。★10-25 は２溝の肩、もしくはかろうじて残った３溝覆土からの出土である。通路状遺構堆積土中にも多くの遺物が混入しているが、実測遺物は少なく（図 56 ～ 59）、小破片ばかりであったことがうかがえる。

その下の無遺物層はＡセクション中の第 21 ～ 23・25 層にあたる（図５参照）。構成土は２溝上層の底に堆積した土で、混入物の少ない粘質土である。遺物が出土しないのは浚渫を頻繁に行っていたからかもしれない。

無遺物層下の遺物集中は２溝下層の覆土である。２溝上層覆土に比べ出土遺物の分布密度は低い。他の遺物集中層と比べてかわらけの出土数が多いように見えるが、実際に報告しているかわらけの出土層位を見ると２溝上層出土のものも多く（図 11 参照）、単純にＡ区の２溝上層から出土したかわらけの位置情報の記録が十分に取れていないためと考えられる。２溝下層のかわらけは、覆土中はもちろんのこと、溝底からも出土している（○10-17、○10-18 など）。いずれも小型のかわらけであるが、○10-17 は器壁が薄く、丸みを帯びて立ち上がる形状であり、14 世紀代の製品と考えられる。かわらけは２個体接合している（○10-23、○10-24）。いずれも隣接した２点であり、埋没の過程で割れたのであろう。

同じ層から、常滑産片口鉢Ⅱ類の口縁部破片（▲10-27）も出土している。8～9型式、14 世紀中葉～15 世紀中葉の遺物である。このことから、2溝下層は14 世紀中葉以降に埋没したと判断できる。

図 57～59には、瓦の種類・時期別に分布と接合関係を図示した。

図 57 は男瓦と鐙瓦の分布・接合関係である。A区で出土した男瓦はA類（○：Ⅰ期～Ⅱ期）・B類（●：Ⅱ期）のみであり、C・D類は出土していない。B類よりA類の出土数が多いのはこれまでの永福寺の調査結果と同様である。鐙瓦は、運華文（▲）1点、巴文（■）3点、瓦当がはがれて型式分類不明なもの（△）3点である。いずれも胎土・瓦当文様からⅠ期瓦としている。

やはり2溝下層は遺物が少ない。2溝上層と通路状遺構堆積土では遺物の密度にほとんど変わりはないが、実測個体は2溝上層覆土に多く、大型の破片が多かったことがわかる。

接合遺物は男瓦A類（○）の3個体である。そのうち1個体は破片が3m以上離れて接合しているが、断面からもわかるように2溝上層の同一覆土中での接合である。ほか2個体はAベルト中からの出土で、近接した2点ずつの接合である。

図58･59は女瓦と宇瓦の出土分布・接合関係図である。Ⅰ期（図58）とⅡ・Ⅲ期（図59）に分けて図示した。

Ⅰ期の女瓦は圧倒的にA類（○）が多く、B類（●）は1点のみである。F類は出土していない。宇瓦（▲）は3点出土したが、全体的に残存状況は悪く、比較的残りの良い個体でも瓦当面が剥落してしまっている（▲25-6）。

平面分布に大きな偏りはないが、断面分布を見るとやはり2溝下層からの出土は少なく、2溝上層と通路状遺構堆積土に集中している様子が見える。通路状遺構堆積土中の分布密度が若干高いのは十字柱穴確認に伴う掘削で出土した2面以下の遺物が原因である。しかし、実測個体は○33-2 を除いて全て2溝上層出土であり、大型破片が2溝上層に集中する状況は男瓦の分布と同様である。

接合個体は3個体である。いずれも女瓦A類（○）で、2個体は実測できた（○29-1・○30-2）。○29-1は比較的離れた破片3点が接合しているが、2溝上層覆土中での接合である。

Ⅱ期・Ⅲ期の女瓦・宇瓦の平面分布は、図 57 や 58 と異なり通路状遺構堆積土の分布が希薄になっている（図 59）。出土数は女瓦D類（○）が最も多いが、C類（●）も一定数出土している。E類は出土していない。宇瓦はⅡ期（▲）・Ⅲ期（■）ともに 1 点ずつの出土で、分布の違いは読み取れない。ちなみにⅡ期の宇瓦は寺銘瓦、Ⅲ期の宇瓦は今回新形式と認定された陽刻上向剣頭文の宇瓦（■25-3：図 25 参照）である。

断面分布をみると、他の分布図と同様、2溝下層からはほとんど遺物が出土しておらず、2溝上層覆土と通路状遺構堆積土中の遺物密度が高い。特に2溝上層からの出土が多く、実測個体も全て2溝上層から出土している。その数も他の時期の瓦に比べて多くなっていることが読み取れる。

以上、分布図を個別に見てきたが、全体を通してみると、同じⅡ期の溝ながら2溝の上層・下層で出土分布の様相が異なることがわかるであろう。

下層出土の遺物は覆土中に比較的まんべんなく散っており、かわらけは実測可能な個体が多かったものの、瓦は実測対象とならない破片が多かった。それに対して、上層では上部に堆積した一部の薄い土層に、残存状況の良好なⅠ・Ⅱ期の瓦が密集している状態であった。

これまでの永福寺の調査で明らかにされているように、2溝が 13 世紀中ごろに開削され、少なくとも 15 世紀まで改修を経ながら存続していたとするならば、2溝下層の覆土は永福寺存続時の埋め土であり、2溝上層の底部に堆積した無遺物の粘質土層は、2溝下層の作り替えを経てのち、2溝上層が機能しているときに堆積したものと考えてよい。ちなみに、最も新しい2溝下層出土遺物は 14 世紀半ば～ 15 世紀半ばまでの製品（常滑産片口鉢▲10-27）であり、作り替えの時期は 14 世紀半ば以降と考えられる。

では、2溝上層の上部に堆積した土層はいつの埋め土であろうか。出土状況は、浅くなった2溝上層部分にまだ残りの良い瓦を大量に投げ込んだような様相と言える。大型のⅡ期瓦を男瓦・女瓦関係なく大量に投げ込むのは、Ⅱ期瓦が不要になったときしかありえまい。それは、Ⅱ期の下限とされる

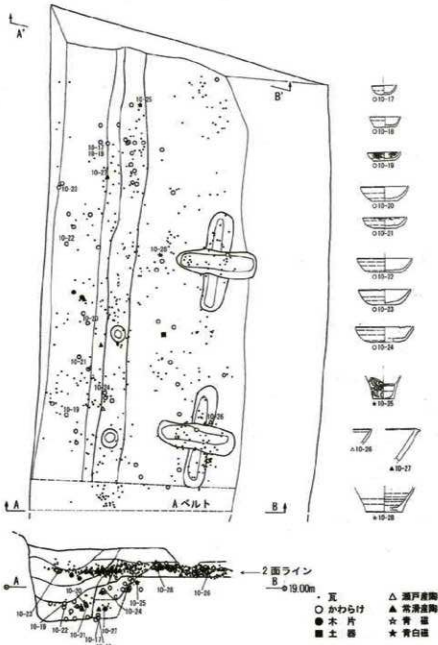


図 56　A区の遺物出土状況

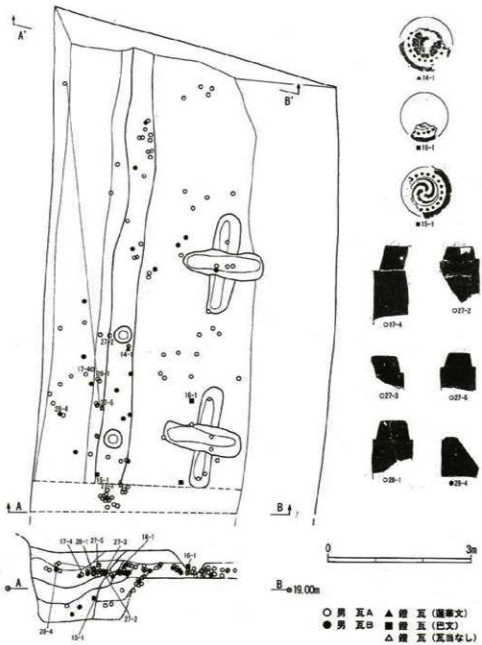


図 57　男瓦、鐙瓦の出土状況

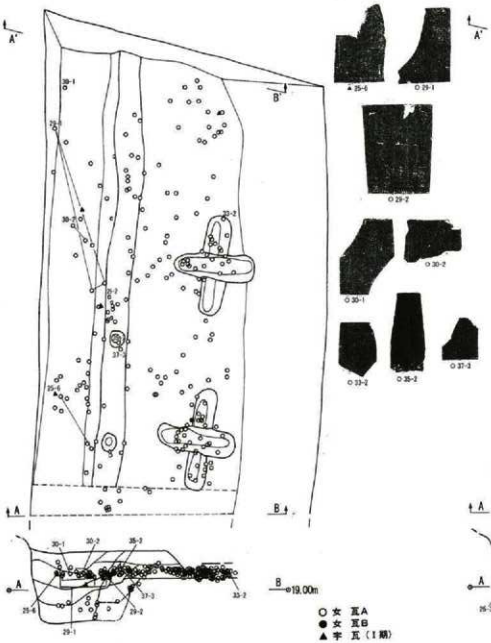


図 58　女瓦・宇瓦の出土状況（Ⅰ期）

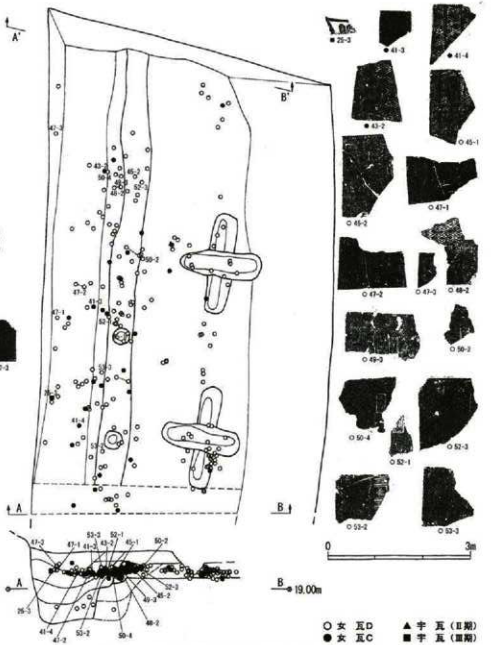


図 59　女瓦・宇瓦の出土状況（Ⅱ・Ⅲ期）

弘安三年（1280）の焼失か、永福寺の廃絶後と考えられるが、焼失の時期は２溝下層出土遺物の年代とあわないため、廃絶後と考えるのが妥当であろう。

その後、２溝が完全に埋没したのちに堆積した層からは、初期伊万里などが出土しており（図 10 参照）、出土遺物の面では 16 世紀代が全くの空白となっている状況がみられる。永福寺廃絶の時期もおのずと知られよう。

調査区東側の通路部分からも瓦の破片が大量に出土している。しかし、堂裏側とはいえ、丁寧に貝砂を敷いて版築された通路に、瓦の破片がこうも混ざるものであろうか。土を敷く際、故意に混ぜたのであろうか。

今回、遺物を三次元的に取り上げたのはＡ区のみ、しかも冒頭で断ったように、その数は出土遺物の約半分であった。遺物の分布からその意味するところを論ずるに決して十分な数とはいえず、非常に心残りではある。しかし、そのような厳しい条件ではあったものの、溝の上層・下層、そして通路部分での出土状況の相違をある程度は確認することができ、一定の成果は得られた。

同じように主要伽藍や池についても出土遺物の記録を取り、検討できていたらと想像するが、それは夢想にすぎないであろう。

ともあれ、今回のように遺物の出土位置を三次元的に記録するということは、史跡永福寺跡における長い発掘調査の歴史において初めての試みであり、意義あるものであったと言える。まだ永福寺跡の発掘調査は終了していない。今回の試みが次回へ繋がることを期待したい。

第4章　まとめ

(1) I区

a．2溝と切岸

2溝は風化、崩落の進んでいる崖面上部とは異なり岩盤を削り取った掘削痕が残る良好な状態で保存されていた。創建期に3溝壁面から切岸状に崖面が立ち上がっていたかは、規模の大きな2溝の開削によって失われてしまい不明である。しかし少なくとも2溝開削時には切岸状に崖面を切り立てて削平したことは明らかである。溝に合わせて堂裏を直線的に開削した崖面が、2溝開削の時期を寛元・宝治年間の永福寺修理の時期に位置づけられるならば、開削年代が鎌倉中期まで遡ることの出来る貴重な遺構といえよう。

b．二階堂背後の柱穴列と貝砂敷きの通路状遺構

2溝の肩に沿っておよそ2mの間隔で岩盤に穿たれた柱穴列は、平成元年時の調査でも検出確認されている柱穴である。いずれも堂背後と溝に沿って複数列確認されているものである。これらの柱穴列は建物の背後に設置された目隠し塀の基礎と考えられる。また、平坦に削平された岩盤面上に敷かれた細かい貝殻混じりの砂は、すべての面を貝砂面まで下げていないので不明な点は多いが、堂舎背後、南北方向に設置された目隠し塀に沿って確認されていることから通路に敷かれていたものと考えられる。貝砂の範囲を図上で復元すると通路の幅は約4m程である。

c．十字形柱穴

今回の調査で確認した平面十字形の柱穴も、平成元年に確認した平面十字形の柱穴も二階堂内陣の柱列の延長線上に位置している。しかし堂背後、裳階部分からの距離を測ると約9mあり、直接関わりのある構造物とは考えにくい状況である。想像を逞しくするならば、一時的に太く長い柱（竿など）を立てるために設置した基礎部分の根固めに関わる遺構と考えられる。これを裏付けるように平成2年度、堂前面で多数確認されている規則性のある柱穴や布掘り等の遺構は、儀式に使われた幡等を立てた痕跡と考えられている。関連性が指摘できる。

(2) II区

a．2溝と切岸

I区で検出確認した2溝をII区でも検出確認することが出来た。堂舎背後の山際を南北に開削された細長い2溝は、屏風のように2区の手前でくの字に折れ曲がることが明らかにされた。崩落の危険があるために2溝壁面から崖面への立ち上がりは目視することは出来なかったが、I区の状況と同じ様に立ち上がると見ることが出来よう。

表土が薄いため後世の耕作により岩盤面直上まで撹乱が及び面の確認は出来なかったが、広範囲に広がる平坦な岩盤面から、I区と同じように創建期には大規模な掘削が行われていたことは明らかである。

平成8年度以来の大きな調査となった。整備事業に係る表土層の搬出の時期と重なり、さながら発掘現場は土木工事現場と化していた。そのような中、諸先生、諸先輩から多くの貴重なご教授を受け、また周辺住民の皆様の深いご理解とご支援を賜り、三堂裏側の山裾の岩盤を屏風状に切り立てて開削された2溝(幅約2m、深さ約1.5m)を約45m確認することができた。また2溝周辺の調査をおこない、目隠し塀や貝砂を敷き詰めていた通路状遺構を確認することができた。寒風吹きすさぶ2ヶ月間、事故もなく無事に調査を終えることができたことを記して、深く感謝するしだいである。

永福寺出土瓦の型式分類表

蓮華文鎧瓦

ＹＡＩ０１ａ	Ⅰ期
ＹＡＩ０１ｂ	Ⅰ期
ＹＡＩ０１ｃ	Ⅰ期
ＹＡＩ０１ｄ	Ⅰ期
ＹＡＩ０１ｅ	Ⅰ期
ＹＡＩ０１ｆ	Ⅰ期
ＹＡＩ０１ｇ	Ⅰ期
ＹＡＩ０１ｉ	Ⅰ期
ＹＡＩ０２	Ⅰ期
ＹＡＩ０３	Ⅰ期

巴文鎧瓦

ＹＡⅡ０１	Ⅰ期
ＹＡⅡ０２ａ	Ⅰ期
ＹＡⅡ０２ｂ	Ⅰ期
ＹＡⅡ０３	Ⅰ期
ＹＡⅡ０４ａ	Ⅱ期
ＹＡⅡ０４ｂ	Ⅱ期
ＹＡⅡ０５	Ⅱ期
ＹＡⅡ０６	Ⅲ期
ＹＡⅡ０７	Ⅲ期
ＹＡⅡ０８	Ⅲ期
ＹＡⅡ０９	Ⅲ期
ＹＡⅡ１０	Ⅲ期
ＹＡⅡ１１ａ	Ⅰ期
ＹＡⅡ１１ｃ	Ⅰ期
ＹＡⅡ１１ｂ	Ⅰ期
ＹＡⅡ１２ａ	Ⅰ期
ＹＡⅡ１２ｂ	Ⅰ期
ＹＡⅡ１３	Ⅱ期
ＹＡⅡ１４ａ	Ⅱ期
ＹＡⅡ１４ｂ	Ⅱ期
ＹＡⅡ１５	Ⅲ期

寺銘鎧瓦

ＹＡⅢ０１ａ	Ⅱ期
ＹＡⅢ０１ｂ	Ⅱ期
ＹＡⅢ０１ｃ	Ⅱ期

唐草文字瓦

ＹＮＩ０１ａ－１	Ⅰ期
ＹＮＩ０１ａ－２	Ⅰ期
ＹＮＩ０１ｂ	Ⅰ期
ＹＮＩ０１ｄ	Ⅰ期
ＹＮＩ０１ｅ－１	Ⅰ期
ＹＮＩ０１ｅ－２	Ⅰ期
ＹＮＩ０１ｆ	Ⅰ期
ＹＮＩ０１ｈ－１	Ⅰ期
ＹＮＩ０１ｈ－２	Ⅰ期
ＹＮＩ０１ｋ	Ⅰ期
ＹＮＩ０１新(図24－３)	Ⅰ期
ＹＮＩ０２	Ⅲ期
ＹＮＩ０３	Ⅰ期
ＹＮＩ０４	Ⅰ期
ＹＮＩ０５	Ⅲ期
ＹＮⅣ０１	Ⅰ期

剣頭文字瓦

ＹＮⅡ０１	Ⅰ期
ＹＮⅡ０３	Ⅱ期
ＹＮⅡ０５ａ	Ⅲ期
ＹＮⅡ０５ｂ	Ⅲ期
ＹＮⅡ０６	Ⅲ期
ＹＮⅡ０７	Ⅲ期
ＹＮⅡ０８	Ⅲ期
ＹＮⅡ０９	Ⅲ期
ＹＮⅡ１０	Ⅲ期
ＹＮⅡ１１	Ⅲ期
ＹＮⅡ１２	Ⅲ期
ＹＮⅡ１３	Ⅰ期
ＹＮⅡ１５	Ⅲ期
ＹＮⅡ新(図25－３)	Ⅲ期

寺銘字瓦

ＹＮⅢ０１ａ	Ⅱ期
ＹＮⅢ０１ｂ	Ⅱ期
ＹＮⅢ０１ｃ	Ⅱ期
ＹＮⅢ０３ａ	Ⅱ期
ＹＮⅢ０３ｂ	Ⅱ期

男瓦

Ａ類	Ⅰ・Ⅱ期
Ｂ類	Ⅱ期
Ｃ類（東海地方窯産）	Ⅰ期
Ｄ類	Ⅲ期

女瓦

Ａ類	Ⅰ期
Ｂ類	Ⅰ期
Ｃ類（水殿瓦窯産）	Ⅱ期
Ｄ類	Ⅱ期
Ｅ類	Ⅲ期
Ｆ類（東海地方窯産）	Ⅰ期

分類は国指定史跡 永福寺跡 遺物編・考察編 平成14年３月による分類をもちいている。
※太字は本報掲載分を示す。

出土遺物観察および法量表

図10　Ⅰ区1面まで出土遺物・2面まで出土遺物・光波取り上げ遺物　　単位はcm

図番号	遺物名	法量	( )は復元値		備考	出土地点
		口径	底径	器高		
図10－1	かわらけ	7.6	5.0	1.6	轆轤成形	Ⅰ－Ａ・Ｂ区１面まで
－2	かわらけ	9.0		1.9	手捏ね成形	Ⅰ－Ａ・Ｂ区１面まで
－3	瀬戸 折縁皿底部片				灰釉ハケ塗りか	Ⅰ－Ａ・Ｂ区１面まで
－4	瀬戸 灰釉皿	(13.8)	(6.9)	2.9	遺存部全面施釉	Ⅰ－Ａ・Ｂ区１面まで
－5	常滑 片口鉢(Ⅱ類)底部片					Ⅰ－Ａ・Ｂ区１面まで
－6	染付 碗				高台内無釉 高台中心部突起する	Ⅰ－Ａ・Ｂ区１面まで
－7	かわらけ	(8.0)	4.9	2.2	轆轤成形	Ⅰ－Ｄ区２面まで
－8	かわらけ	(8.3)	(5.0)	2.1	轆轤成形	Ⅰ－Ｂ区２面まで
－9	かわらけ	(8.4)	4.9	2.1	轆轤成形	Ⅰ－Ｄ区２面まで
－10	かわらけ	(8.5)	(6.4)	1.6	轆轤成形	Ⅰ－Ｄ区２面まで
－11	かわらけ	(11.4)	(6.8)	3.1	轆轤成形	Ⅰ－Ｄ区２面まで
－12	かわらけ	(11.8)	(7.6)	3.1	轆轤成形	Ⅰ－Ｄ区２面まで
－13	かわらけ	(13.0)	6.7	3.4	轆轤成形	Ⅰ－Ｄ区２面まで
－14	かわらけ	(12.8)			手捏ね成形	Ⅰ－Ａ区２面まで
－15	かわらけ	(12.8)			手捏ね成形	Ⅰ－Ｂ区２面まで

-16	瀬戸灰釉卸皿底部片	(13.8)			古瀬戸中Ⅲ期（14c中頃）	Ⅰ-D区２面まで
-17	かわらけ	(5.8)	(2.7)	2.1	轆轤成形	Ⅰ-A区　座標有り
-18	かわらけ	7.3	4.7	2.4	轆轤成形	Ⅰ-A区　座標有り
-19	かわらけ	7.8	5.0	2.0	轆轤成形　灯明皿	Ⅰ-A区　座標有り
-20	かわらけ	(11.4)	(5.7)	3.5	轆轤成形	Ⅰ-A区　座標有り
-21	かわらけ	10.5	5.4	2.7	轆轤成形　灯明皿	Ⅰ-A区　座標有り
-22	かわらけ	12.9	7.8	3.4	轆轤成形	Ⅰ-A区　座標有り
-23	かわらけ	12.2	6.0	3.8	轆轤成形	Ⅰ-A区　座標有り
-24	かわらけ	13.8	7.5	3.6	轆轤成形　灯明皿	Ⅰ-A区　座標有り
-25	青白磁 梅瓶		(5.6)		小型品	Ⅰ-A区　座標有り
-26	瀬戸 天目茶碗				古瀬戸中Ⅳ期（14c中頃）	Ⅰ-A区　座標有り
-27	常滑 片口鉢(Ⅱ類)				8～9型式(14c中～15c中頃)	Ⅰ-A区　座標有り
-28	青磁 広口無頸壺		(8.8)		越州窯	Ⅰ-A区　座標有り

図11　Ⅰ区2溝上層出土遺物

単位はcm

図番号	遺物名	法量 ( )は復元値			備考	出土地点
		口径	底径	器高		
図11-1	かわらけ	8.5	5.9	2.5	轆轤成形	Ⅰ-A区
-2	かわらけ	8.2	4.5	2.2	轆轤成形	Ⅰ-E区
-3	かわらけ	7.9	5.0	2.5	轆轤成形	Ⅰ-B区
-4	かわらけ	8.1	5.7	2.2	轆轤成形	Ⅰ-B区
-5	かわらけ	(8.2)	(5.3)	2.3	轆轤成形	Ⅰ-A区
-6	かわらけ	(7.9)	(5.6)	2.0	轆轤成形	Ⅰ-A区
-7	かわらけ	7.6	4.8	2.1	轆轤成形	Ⅰ-B区
-8	かわらけ	(8.3)	5.0	2.1	轆轤成形	Ⅰ-A区
-9	かわらけ	7.5	4.7	2.2	轆轤成形	Ⅰ-B区
-10	かわらけ	(7.9)	5.1	2.4	轆轤成形	Ⅰ-B区
-11	かわらけ	8.0	5.4	2.0	轆轤成形	Ⅰ-C区
-12	かわらけ	(8.4)	5.2	2.4	轆轤成形	Ⅰ-D区
-13	かわらけ	(8.0)	(6.0)	2.1	轆轤成形	Ⅰ-D区
-14	かわらけ	7.5	5.2	1.6	轆轤成形	Ⅰ-B区
-15	かわらけ	(8.7)		1.4	手捏ね成形	Ⅰ-D区
-16	かわらけ	(11.0)	6.1	3.4	轆轤成形	Ⅰ-D区
-17	かわらけ	(10.8)	6.0	3.0	轆轤成形	Ⅰ-B区
-18	かわらけ	11.3	6.3	3.0	轆轤成形	Ⅰ-E区
-19	かわらけ	(11.0)	(6.3)	2.7	轆轤成形	Ⅰ-E区
-20	かわらけ	(10.7)	(7.0)	3.0	轆轤成形	Ⅰ-E区
-21	かわらけ	(11.6)	6.0	3.3	轆轤成形	Ⅰ-D区
-22	かわらけ	(11.7)	6.6	3.4	轆轤成形	Ⅰ-E区
-23	かわらけ	(11.8)	(7.0)	2.9	轆轤成形	Ⅰ-C区
-24	かわらけ	(11.8)	6.6	3.2	轆轤成形	Ⅰ-D区
-25	かわらけ	(10.8)	7.8	3.5	轆轤成形	Ⅰ-C区
-26	かわらけ	13.2	8.6	3.2	轆轤成形	Ⅰ-E区
-27	かわらけ	(13.6)	(9.0)	3.3	轆轤成形	Ⅰ-B区
-28	かわらけ	(14.0)	8.2	3.5	轆轤成形	Ⅰ-D区
-29	かわらけ	(12.4)	(7.2)	3.7	轆轤成形	Ⅰ-A区
-30	かわらけ	(13.0)	(8.2)	2.9	轆轤成形	Ⅰ-D区
-31	かわらけ	(12.7)	(7.7)	3.7	轆轤成形	Ⅰ-E区
-32	かわらけ	14.2	8.5	3.7	轆轤成形	Ⅰ-D区
-33	かわらけ	(13.4)	(7.0)	3.6	轆轤成形	Ⅰ-D区
-34	かわらけ	12.7	(8.7)	3.0	轆轤成形	Ⅰ-E区
-35	かわらけ	(13.6)	(8.0)	3.4	轆轤成形	Ⅰ-B区
-36	かわらけ	(13.8)	(8.4)	3.5	轆轤成形	Ⅰ-B区
-37	かわらけ	(12.2)	8.4	3.3	轆轤成形	Ⅰ-D区
-38	かわらけ	13.2	7.4	3.2	轆轤成形	Ⅰ-A区
-39	かわらけ	(16.0)	(8.6)	4.6	轆轤成形	Ⅰ-B区
-40	かわらけ	17.1	11.3	3.7	轆轤成形	Ⅰ-E区
-41	かわらけ	(12.6)			手捏ね成形	Ⅰ-A区
-42	青磁 鉢口縁部片					Ⅰ-A区

-43	常滑 甕口縁部片				6a型式（13c後半）	Ⅰ-A区
-44	常滑 甕底部片					Ⅰ-C区
-45	漆器 椀		7.2		洲浜と植物 外底部に切り印	Ⅰ-B区

図12　Ⅰ区2溝下層出土遺物　　単位はcm

図番号	遺物名	法量（ ）は復元値			備考	出土地点
		口径	底径	器高		
図12-1	かわらけ	7.3	4.0	1.9	轆轤成形	Ⅰ-B区
-2	かわらけ	(7.0)	(4.2)	2.2	轆轤成形	Ⅰ-B区
-3	かわらけ	8.5	4.4	2.1	轆轤成形	Ⅰ-A区
-4	かわらけ	(8.2)	(5.2)	2.2	轆轤成形	Ⅰ-B区2溝拡張
-5	かわらけ	7.9	5.3	2.2	轆轤成形	Ⅰ-A区
-6	かわらけ	(7.4)	(4.7)	2.0	轆轤成形	Ⅰ-B区
-7	かわらけ	8.1	5.4	2.2	轆轤成形	Ⅰ-A区
-8	かわらけ	7.9	4.3	2.2	轆轤成形	Ⅰ-B区
-9	かわらけ	(7.6)	(4.6)	2.2	轆轤成形	Ⅰ-C区
-10	かわらけ	7.7	5.4	1.8	轆轤成形	Ⅰ-B区
-11	かわらけ	(7.2)	(5.0)	1.8	轆轤成形	Ⅰ-B区
-12	かわらけ	(8.3)	(5.2)	2.0	轆轤成形	Ⅰ-B区
-13	かわらけ	8.6	6.2	1.9	轆轤成形	Ⅰ-B区2溝拡張
-14	かわらけ	(7.2)	5.4	1.7	轆轤成形	Ⅰ-D区
-15	かわらけ	(7.5)	5.8	1.5	轆轤成形	Ⅰ-D区
-16	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.3	轆轤成形	Ⅰ-B区2溝拡張
-17	かわらけ	(11.3)	6.3	3.0	轆轤成形	Ⅰ-E区
-18	かわらけ	(10.9)	6.0	3.3	轆轤成形	Ⅰ-D区
-19	かわらけ	(12.2)	(8.0)	3.5	轆轤成形	Ⅰ-A区
-20	かわらけ	(12.9)	(6.8)	3.0	轆轤成形	Ⅰ-B区
-21	かわらけ	(14.0)	(8.0)	3.2	轆轤成形	Ⅰ-A区
-22	かわらけ	(13.3)	(7.8)	3.5	轆轤成形	Ⅰ-B区
-23	かわらけ	(12.8)	(7.8)	3.0	轆轤成形	Ⅰ-B区2溝拡張
-24	かわらけ	13.7	(9.0)	3.3	轆轤成形	Ⅰ-D区
-25	かわらけ	(13.1)	(7.2)	3.6	轆轤成形	Ⅰ-B区
-26	かわらけ	(11.4)	(7.5)	3.4	轆轤成形	Ⅰ-D区
-27	かわらけ	11.3	7.9	3.2	轆轤成形	Ⅰ-C区
-28	かわらけ	(7.0)	(11.8)	3.1	轆轤成形	Ⅰ-B区2溝拡張
-29	かわらけ	12.8	8.0	3.1	轆轤成形	Ⅰ-B区2溝拡張
-30	かわらけ	(14.4)		3.5	手捏ね成形	Ⅰ-D区
-31	かわらけ	(13.3)			手捏ね成形	Ⅰ-C区
-32	かわらけ	(13.1)		3.0	手捏ね成形	Ⅰ-E区
-33	白磁 口兀皿口縁部片					Ⅰ-B区
-34	常滑 甕口縁部片				5型式（13c中）	Ⅰ-E区
-35	瀬戸 折縁皿底部片					Ⅰ-C区

図13　Ⅱ区2溝出土遺物　　単位cm

図番号	遺物名	法量（ ）は復元値			備考
		口径	底径	器高	
図13-1	かわらけ	(7.8)	4.9	2.2	轆轤成形　灯明皿
-2	かわらけ	(7.8)	(4.7)	2.4	轆轤成形
-3	かわらけ	(13.5)	(8.0)	3.4	轆轤成形
-4	銭　景祐元寶	径 2.4	重さ3.6g		初鋳年1034 北宋　篆書
-5	銭　嘉祐通寶	径 2.4	重さ3.9g		初鋳年1056 北宋　真書
-6	銭　嘉祐通寶	径 2.4	重さ3.5g		初鋳年1056 北宋　篆書
-7	銭　元豊通寶	径 2.4	重さ3.8g		初鋳年1078 北宋　行書
-8	銭　元豊通寶	径 2.4	重さ3.7g		初鋳年1078 北宋　行書
-9	銭　元祐通寶	径 2.3	重さ4.2g		初鋳年1086 北宋　篆書
-10	銭　元符通寶	径 2.4	重さ3.5g		初鋳年1098 北宋　篆書

瓦類の観察および計測表

蓮華文鐙瓦　　F：複弁　R：連子　S：珠文　（　）推定値　単位cm

図番号	出土地点 座標有無 型式分類	瓦当径	内区 文様	内区 内区径	内区 中房径	内区 蓮子数	外区 幅	外区 内縁 幅	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高さ	男瓦部 径	男瓦部 厚さ	胎土	色調	焼成	段部から釘穴
図14-1	Ⅰ-A区 座標有 YAⅠ01d	(17.0)	(F8)	10.0	4.5	(1+8)	3.5	2.0	(S18)	2.0	1.5			A類	黒 灰	軟	
-2	Ⅰ-E区 2溝上層 座標無 YAⅠ01e	(17.2)	(F8)	10.2	4.5	1+8	3.2	1.2	(S24)	2.0	1.1			A類	灰	軟	
-3	Ⅰ-E区 2溝上層 座標無 YAⅠ01e	17.0	F8	10.5	4.5	1+8	3.0	1.3	S24	1.8	1.1			A類	灰	硬	
-4	Ⅰ-D区 2溝上層 座標無 YAⅠ01e	17.0	F8	9.5	4.5	(1+8)	3.2	1.2	S24	2.0	1.0			A類	灰	硬	

巴文・寺銘鐙瓦　　巴方向：右左　圏線：内・外　S：珠文　（　）推定値　単位cm

図番号	出土地点 座標有無 型式分類	瓦当径	内区 文様(巴文) 内区径	外区 幅	外区 圏線	外区 内縁 幅	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高さ	男瓦部 径	男瓦部 厚さ	胎土	色調	焼成	段部から釘穴
図15-1	Ⅰ-A区 座標有 YAⅡ02a	17.5	巴文 左 9.9	3.6		1.6	(S18)	2.0	1.5	16.0	2.2	A類	灰	硬	
-2	Ⅰ-D区 2面まで 座標無 YAⅡ05	17.0	巴文 左 竹管文 9.5	3.8	1	1.5	S21	2.3	1.0	17.0	2.2	B類	黒 灰	硬	
図16-1	Ⅰ-A区 座標有 YAⅡ02		巴文 左	3.0		2.0	残数 S5	1.0	1.0			A類	灰	軟	
-2	Ⅰ-A区 2面P8 座標無 YAⅡ04b	(16.4)	巴文	3.5	1	1.6	(S20)	1.9	1.2			B類	灰 白	硬	
-3	Ⅰ-E区 2溝上層 座標無 YAⅡ04b		巴文 右 目押印									B類	黒 灰	硬	
-4	Ⅰ-A区 2溝上層 座標無 YAⅢ01a	(17.0)	寺銘 12.0	3.4		1.4	残数 S18	2.0	1.2			B類	黒 灰	硬	

その他の鐙瓦　　（　）推定値　単位cm

図番号	出土地点 座標有無	瓦当径	内区 文様(巴文) 内区径	外区 幅	外区 圏線	外区 内縁 幅	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高さ	男瓦部 径	男瓦部 厚さ	胎土	色調	焼成	段部から釘穴
図16-5	Ⅰ-B区 2面まで 座標無		瓦当部剥離							16.2	2.0	A類	黒 灰	硬	
図17-1	Ⅰ-E区 2溝上層 座標無		瓦当部剥離								3.0	A類	灰	硬	
-2	Ⅰ区表採 座標無		瓦当部剥離							17.0	2.6	A類	灰	硬	

-3	Ⅰ-D区 2溝上層 座標無		釘穴							18.0	2.5	A類	灰	硬	4.0
-4	Ⅰ-A区 座標有り		釘穴								2.5	D類	灰	硬	3.1
図18-1	Ⅰ-D区 2溝上層 座標無		釘穴							16.0	2.0	D類	黒灰	硬	1.5
-2	Ⅱ区2溝 座標無		釘穴							(16.0)	2.5	D類	灰	硬	2.1

唐草文宇瓦　　K:界線 S:珠文 顎部技法A:顎貼 B:折曲 C:瓦当貼 ( )推定値 単位cm

図番号	出土地点 座標有無 型式分類	瓦当部 上弦幅	下弦幅	幅	内区文様 内区幅	上外区 幅	上外区 文様	下外区 幅	下外区 文様	脇区 幅	脇区 文様	女瓦部厚	顎部 顎面幅	顎部 製作技法	胎土	色調	焼成
図19-1	Ⅰ-B区 2溝上層 座標無 YNⅠ01d	33.5	33.5	6.9	唐草 4.8	1.0		1.0		1.8		2.7	3.7	A	A類	灰	硬
図20-1	Ⅰ-E区 2溝上層 座標無 YNⅠ01b			7.0	唐草 4.0	1.3		(1.1)		1.2		2.8		A	A類	灰	硬
-2	Ⅰ-D区 2面まで 座標無 YNⅠ01b			6.7	唐草 4.3	1.0		1.1		1.0		2.9	3.5	A	A類	灰	硬
図21-1	Ⅰ-E区 2溝上層 座標無 YNⅠ01d	34.0	33.3	7.0	唐草 4.4	1.2		0.9		1.5		3.1	3.5	A	A類	灰	硬
図22-1	Ⅰ-E区 2溝上層 座標無 YNⅠ01d			6.5	唐草 4.0	1.2		1.0		1.3		3.0	3.7	A	A類	灰	硬
-2	Ⅰ-A区 2溝上層 座標無 YNⅠ01d			6.8	唐草 4.2	1.2		1.0		1.2		2.0	3.3	A	A類	黒灰	硬
図23-1	Ⅰ-D区 2溝上層 座標無 YNⅠ01d				唐草 (4.4)			1.1		1.5			3.5	A	A類	黒灰	硬
-2	Ⅰ-D区 2溝上層 座標無 YNⅠ01d			7.8	唐草 4.2	1.4		1.2		1.4			4.0	A	A類	灰	硬
図24-1	Ⅰ-A区 2面P10 座標無 YNⅠ01k			6.3	唐草 4.1	1.9		(1.0)				2.4	2.3	A	A類	黒灰	硬
-2	Ⅰ-E区 2溝上層 座標無 YNⅠ03			5.4	唐草 3.6	1.0		0.6				2.6	2.0	B	A類	黒灰	硬

-3	I-D区 2面まで 座標無 YNⅠ01(新)				唐草			1.0		1.0			2.8	A	A類	灰	硬

剣頭文・寺銘宇瓦　　K:界線　S:珠文　顎部技法A:顎貼　B:折曲　C:瓦当貼　　( )推定値　単位cm

図番号	出土地点 座標有無 型式分類	瓦当部 上弦幅	下弦幅	幅	内区文様 内区幅	上外区 幅	上外区 文様	下外区 幅	下外区 文様	脇区 幅	脇区 文様	女瓦部厚	顎部 顎面幅	顎部 製作技法	胎土	色調	焼成
図25 -1	I-D区 2溝上層 座標無 YNⅡ03			6.9	剣頭・下 4.3	1.3		1.4		1.2					C類	灰	軟
-2	I-E区 2溝上層 座標無 YNⅡ06			4.7	剣頭・上 3.3	0.7		0.8		0.8			2.6	C	E類	黒灰	硬
-3	I-A区 2溝上層 座標有 YNⅡ(新)				剣頭・上	0.9				0.8		2.8		C	E類	黒灰	硬
-4	I-E区 2溝上層 座標無 YNⅢ01b			7.6	寺銘 3.8	1.1		1.5					3.3	A	D類	灰	硬
-5	I-E区 2溝上層 座標無 YNⅢ01a				寺銘	1.3								A	D類	灰	硬

その他宇瓦　　K:界線　S:珠文　顎部技法A:顎貼　B:折曲　C:瓦当貼　　( )推定値　単位cm

図番号	出土地点 座標有無 型式	瓦当部 上弦幅	下弦幅	幅	内区文様 内区幅	上外区 幅	上外区 文様	下外区 幅	下外区 文様	脇区 幅	脇区 文様	女瓦部厚	顎部 顎面幅	顎部 製作技法	胎土	色調	焼成
図25 -6	I-A区 座標有				瓦当部 剥離							2.5		A	A類	灰	硬
図26 -1	I-D区 2溝上層 座標無				釘穴							3.0			D類	黒灰	硬
-2	I-A区 2溝下層 座標無				釘穴							2.8			A類	灰	硬

男瓦　　( )推定値　単位cm

図番号	型式	法量 ( )は復元値 長さ	径	厚さ	玉縁長	胎土	色調	焼成	出土地点	備考
図27-1	A類		18.5	2.4		精良	黒灰	硬	I-B区2溝上層	
-2	A類		18.3	2.7		精良	黒灰	硬	I-A区	座標有り
-3	A類		(17.6)	2.5	8.4	精良	黒灰	硬	I-A区	座標有り
-4	A類		(15.4)	2.2	6.9	精良	黒灰	硬	I-A区2面P11	
-5	A類		16.7	2.0	7.5	精良	黒灰	硬	I-A区	座標有り
-6	A類		14.5	2.1		精良	黒灰	硬	I-B区2溝東拡張	
図28-1	A類		19.2	2.5	9.8	精良	灰	硬	I-A区	座標有り
-2	B類		(19.6)	3.1	7.5	粗い	黒灰	硬	I-B区2溝上層	
-3	D類		14.8	1.7		粗い	黒灰	硬	I-B区2溝上層	

−4	B類		(19.0)	2.5		粗い	灰	硬	I−A区	座標有り
−5	D類		(14.0)	2.1		粗い	黒灰	硬	II区2溝	

女瓦

( )推定値　単位cm

図番号	型式	法量 長さ	幅	厚さ	胎土	色調	焼成	出土地点	備考
図29−1	A類	42.0	32.5	2.2	精良	灰	硬	I−A区	座標有り
−2	A類	35.0	24.0	2.0	精良	灰	硬	I−A区	座標有り
図30−1	A類			2.2	精良	灰	硬	I−A区	座標有り
−2	A類		27.0	2.2	精良	灰	硬	I−A区	座標有り
−3	A類			1.6	精良	黒灰	硬	I−B区2溝上層	
図31−1	A類			2.6	精良	灰	硬	I−B区2溝上層	
−2	A類			2.2	精良	灰	硬	I−B区2溝上層	
−3	A類			2.2	精良	灰	硬	I−E区2溝上層	
図32−1	A類			2.5	精良	灰	硬	I−E区2溝上層	
−2	A類			2.2	精良	灰	硬	I−E区2溝上層	
−3	A類			2.1	精良	灰	硬	I−E区2溝上層	
図33−1	A類			2.6	精良	灰	硬	I−D区2溝上層	
−2	A類			2.0	精良	灰	硬	I−A区	座標有り
−3	A類			2.0	精良	灰	硬	I−D区2溝上層	
図34−1	A類			2.4	精良	灰	硬	I−D区2溝上層	
−2	A類			2.1	精良	灰	硬	I−D区2溝上層	
−3	A類			2.1	精良	灰	硬	I−D区2溝上層	
図35−1	A類			2.1	精良	灰	硬	I−E区2溝上層	
−2	A類			2.5	精良	灰	硬	I−A区	座標有り
図36−1	A類			2.0	精良	灰	硬	I−B区2溝上層	
−2	A類			2.4	精良	灰	軟	I−D区2溝上層	
−3	A類			2.0	精良	黒灰	硬	I−D区2溝上層	
図37−1	A類			2.2	精良	灰	硬	I−E区2溝上層	
−2	A類			1.9	精良	灰	硬	I−E区2溝上層	
−3	A類			2.8	精良	黒灰	硬	I−A区	座標有り
図38−1	A類			1.8	精良	灰	硬	I−A区2溝上層	
−2	A類			2.0	精良	黒灰	硬	I−D区2溝上層	
−3	A類			2.1	精良	灰	硬	I−D区2溝上層	
図39−1	B類			2.8	精良	灰	硬	I−B区2面まで	
−2	B類			1.9	精良	灰	硬	I−B区2面まで	
−3	B類			1.9	精良	灰	硬	I−B区2面まで	
−4	B類			2.0	精良	灰	硬	I−B区2溝下層	
−5	B類			2.2	精良	灰	硬	I−A区2面P10	
−6	C類			2.5	良	灰	軟	I−A区2溝上層	
図40−1	C類			2.5	良	黒灰	軟	I−A・B区1面まで	
−2	C類			2.4	良	灰	軟	I−E区2溝上層	
−3	C類			2.7	良	黒灰	軟	I−B区2溝上層	
図41−1	C類			3.0	良	黒灰	軟	I−A・B区1面まで	
−2	C類			2.2	良	灰	軟	I−D区2面まで	
−3	C類			3.0	良	灰	軟	I−A区	座標有り
−4	C類			2.6	良	灰	軟	I−A区	座標有り
図42−1	C類			2.1	良	黒灰	軟	I−B区2溝上層	
−2	C類			2.8	良	黒灰	軟	I−B区2溝上層	
−3	C類			2.8	良	灰	軟	I−B区2溝上層	
図43−1	C類			2.9	良	灰	軟	I−B区2溝上層	
−2	C類			2.5	良	灰	軟	I−A区	座標有り
図44−1	D類			2.9	粗い	黒灰	硬	I−A区2溝上層	
−2	D類			2.1	粗い	黒灰	硬	II区2溝	
−3	D類			2.7	粗い	灰	硬	I−A区2溝上層	
図45−1	D類			3.5	粗い	灰	硬	I−A区	座標有り
−2	D類	38.5		2.2	粗い	灰	硬	I−A区	座標有り

図46-1	D類			3.1	粗い	灰	硬	I-A区2溝上層	
-2	D類			2.5	粗い	黒灰	硬	I-B区2溝上層	
-3	D類			2.9	粗い	灰	硬	I-B区2溝上層	
図47-1	D類			2.5	粗い	灰	硬	I-A区	座標有り
-2	D類		35.0	2.6	粗い	灰	硬	I-A区	座標有り
-3	D類			2.3	粗い	灰	硬	I-A区	座標有り
-4	D類			2.4	粗い	灰	硬	I-表土	
図48-1	D類			2.4	粗い	灰	硬	I-D区2溝上層	
-2	D類			2.5	粗い	黒灰	硬	I-A区	座標有り
-3	E類			1.8	粗い	黒灰	硬	I-D区2溝上層	
-4	E類			1.6	粗い	黒灰	硬	I-B区2面まで	
-5	E類			1.7	粗い	黒灰	硬	I-E区2溝上層	

鬼瓦・人名瓦・寺銘瓦・記号瓦　　( )推定値　単位cm

図番号	瓦の種類	出土地点	備考
図48-6	鬼瓦 小型 YOⅠ不明 Ⅰ期 精良土	I-B区2面まで	
図49-1	人名 宗清 YMⅠ01a 女瓦A類	I-B区2面P1	
-2	人名 文長 YMⅠ04a 女瓦A類	I-E区2溝上層	
-3	寺銘 永福寺 YMⅡ01a 文暦二年 女瓦D類	I-A区	座標有り
図50-1	寺銘 永福寺 YMⅡ01a 文暦二年 女瓦D類	I-A・B区1面まで	
-2	寺銘 永福寺 YMⅡ06a 女瓦D類	I-A区	座標有り
-3	寺銘 永福寺 YMⅡ02b 女瓦D類	I-A・B区1面まで	
-4	寺銘 永福寺 YMⅡ02a 女瓦D類	I-A区	座標有り
図51-1	寺銘 永福寺 YMⅡ02b 女瓦D類	I-B区2溝上層	
図52-1	寺銘 永福寺 YMⅡ不明 女瓦D類	I-A区	座標有り
-2	寺銘 永福寺 YMⅡ不明 女瓦D類	I-A・B区1面まで	
-3	寺銘 永福寺 YMⅡ不明 女瓦D類	I-A区	座標有り
図53-1	記号 △ 三角文 女瓦D類	I-A区溝A	
-2	記号 △ 三角文 女瓦D類	I-A区	座標有り
-3	記号 △ 三角文 女瓦D類	I-A区	座標有り
図54-1	記号 ○ 竹管文 女瓦D類	I-B区2溝上層	
図55-1	記号 ○ 竹管文 女瓦D類	I-B区2溝上層	
-2	記号 ○ 竹管文 女瓦D類	I-B区2溝上層	
-3	記号 ○ 竹管文 女瓦D類	I-A・B区1面まで	

1．Ⅰ区全景（南側から空撮）

2．Ⅰ区全景・西山（東側から空撮）

3．Ⅰ区・Ⅱ区全景（空撮）

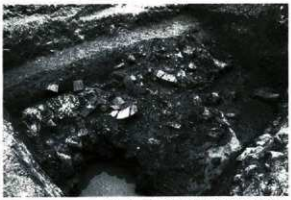
Ⅰ区全景（空撮）

図版２

１．Ⅰ-Ａ区１面と上層から掘り込まれた溝Ａ

２．Ⅰ-Ａ区　１面と上層から掘り込まれた溝Ａの完掘状況

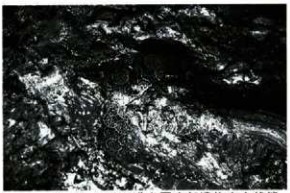
Ⅰ-Ａ区　溝Ａ



3．Ⅰ-D区2溝上層（北から）

4．Ⅰ-C・B・A区2溝上層（南から）

5．Ⅰ-E区2溝上層遺物出土状態



6．Ⅰ-A区2溝上層底部遺物出土状態

1．Ⅰ-C・D・E区2溝上層（北から）

2．Ⅰ-D区2溝上層（北から）

Ⅰ区2溝上層

図版４

３．Ⅰ-Ｄ区２溝上層（北から）

４．Ⅰ-Ｄ区１面と２溝肩（北から）

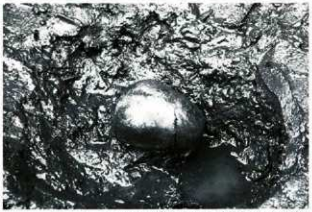
５．Ⅰ-Ｅ区２溝上層（南から）

６．Ⅰ-Ｅ区セクション（南から）

１．２溝西側の岩盤斜面（東から）

２．Ⅰ区１面と２溝上層の完掘状態（北から）

Ⅰ区２溝上層



1．Ⅰ-A区2溝上層底部頭骨出土状況

2．Ⅰ-A区2溝上層底部頭骨出土状況

3．Ⅰ-D区2溝上層遺物出土状況

4．Ⅰ-A区2溝上層樹皮出土状況

5．Ⅰ-D区2溝上層唐草文宇瓦出土状況

6．Ⅰ-D区2溝上層蓮華文鐙瓦出土状況

Ⅰ区2溝上層遺物出土状況

図版６

１．Ⅰ区２溝と堂舎背後西山の斜面

２．Ⅰ区２面全景

３．Ⅰ区２面全景

４．Ⅰ区２面全景（北から）

５．Ⅰ区２面十字形柱穴（柱穴７・８）

６．Ⅰ区２面十字形柱穴（柱穴８）

Ⅰ区２面全景

１．Ⅰ-Ａ区２面の貝砂層（Ａセクション裏側）

２．Ⅰ-Ｃ区２面貝砂層の下で確認した柱穴（Ｐ７）

３．Ⅰ-Ｂ区２面の貝砂層

４．Ⅰ-Ｂ区２面確認の柱穴（Ｐ１）

５．Ⅰ-Ａ区２面で確認した十字形柱穴（柱穴７）

６．Ⅰ-Ｃ区２面２溝肩口の柱穴列（Ｐ５・６・７）

Ⅰ区２面の遺構

図版８

1．Ⅱ区遠景（北から）

2．Ⅱ区東壁（西から）

3．Ⅱ区全景（西から）

4．Ⅱ区全景（北から）

5．Ⅱ区２溝（南から）

6．Ⅱ区掘り下げ作業風景

Ⅱ区

1．Ⅰ区Dセクション

2．Ⅰ区Aセクション

3．Ⅰ区南壁セクション

4．Ⅰ区Aセクションと切岸

5．Ⅰ区Bセクション

Ⅰ区のセクション

図版 10

1．Ⅰ区北壁セクション

3．Ⅰ区北壁セクション

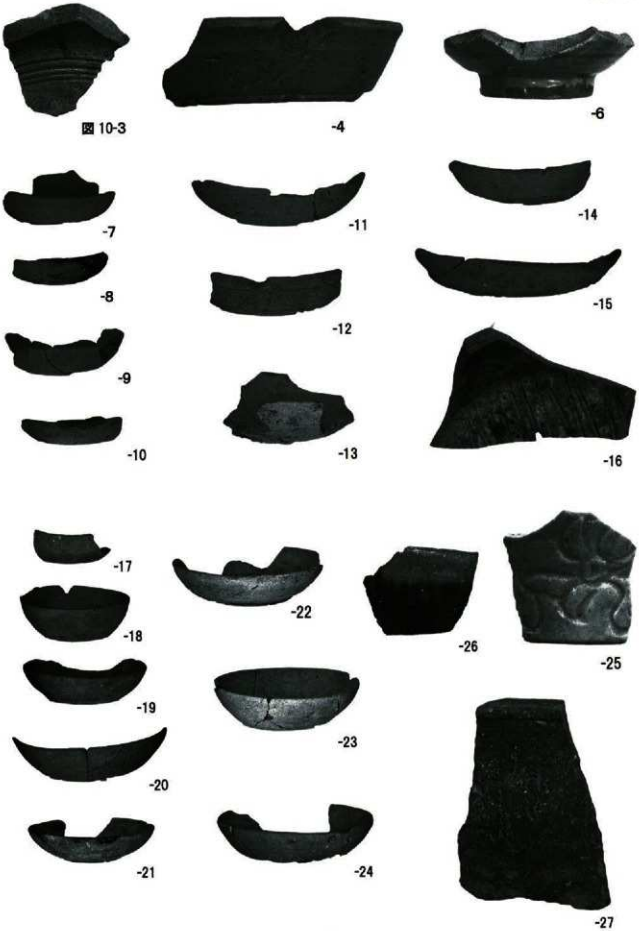
4．Ⅰ区Cセクション

2．Ⅰ区２溝完掘状況

5．Ⅰ-C区材木出土状況

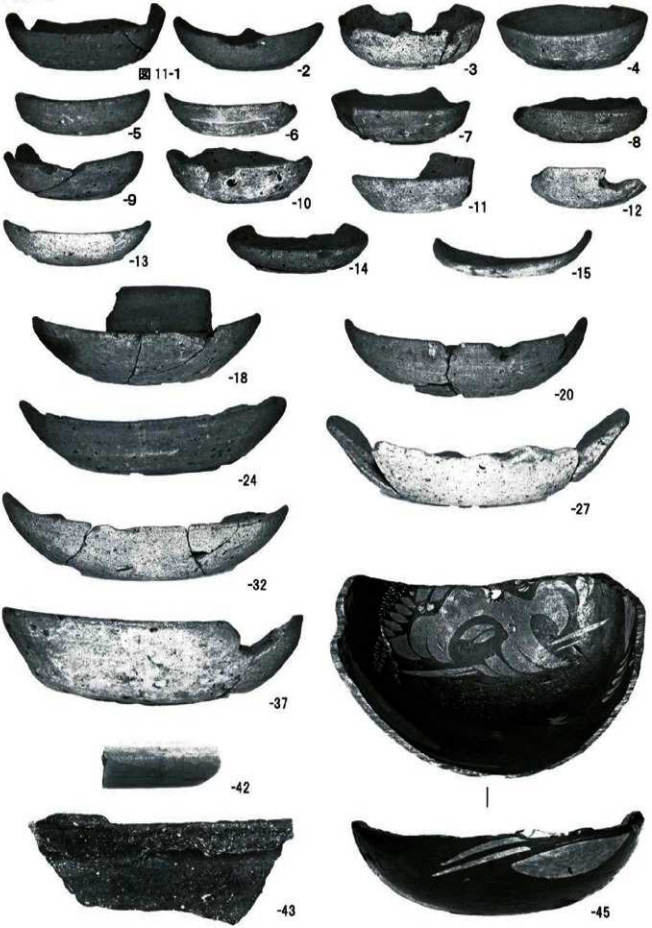
6．Ⅰ区２溝作業風景

Ⅰ区のセクション

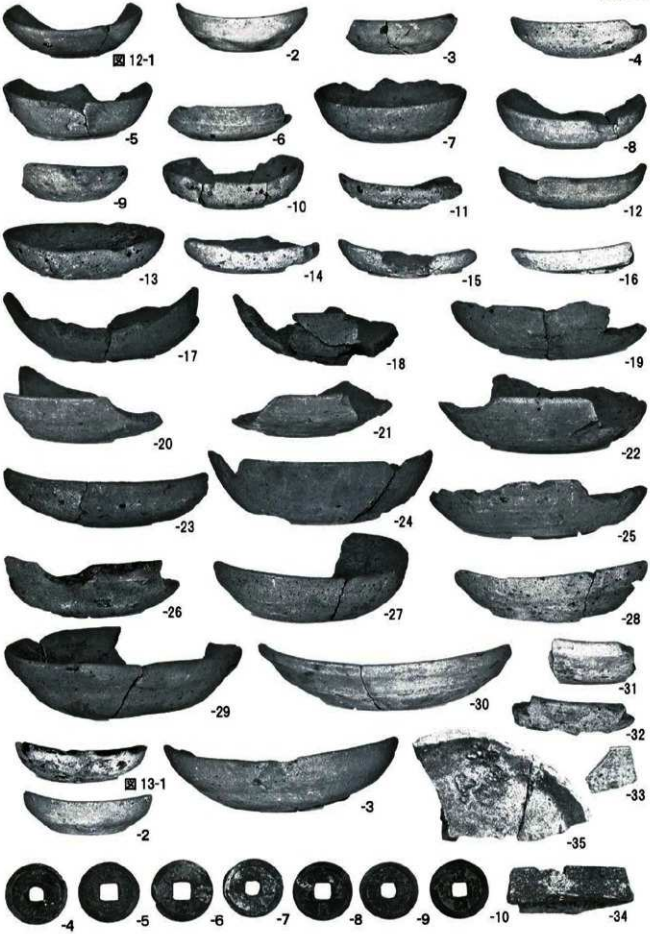


Ⅰ区１面まで、２面まで出土遺物

図版 12



Ⅰ区２溝上層出土遺物



Ⅰ区２溝下層、Ⅱ区２溝出土遺物

図版 14

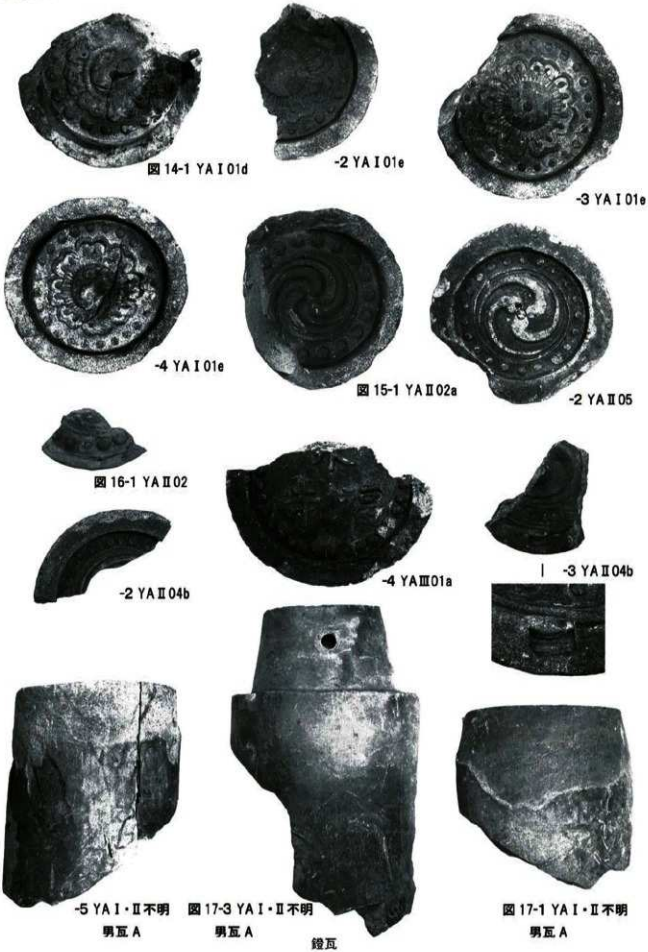


図 14-1 YA I 01d
-2 YA I 01e
-3 YA I 01e
-4 YA I 01e
図 15-1 YA II 02a
-2 YA II 05
図 16-1 YA II 02
-2 YA II 04b
-4 YA III 01a
-3 YA II 04b
-5 YA I・II 不明
明瓦 A
図 17-3 YA I・II 不明
明瓦 A
鐙瓦
図 17-1 YA I・II 不明
明瓦 A

図 20-2 YNⅠ01b

図 20-1 YNⅠ01b

図 19-1 YNⅠ01d

図 24-1 YNⅠ01k

図 24-2 YNⅠ03

図 24-3 YNⅠ01 新

図 25-1 YNⅡ03

図 25-3 YNⅡ新

図 25-2 YNⅡ06

図 25-4 YNⅢ01b

図 25-5 YNⅢ01a

図 21-1 YNⅠ01d

図 26-1 YNⅢ不明 女瓦 D

宇瓦

図版 16

図 27-1 男瓦 A

-2 男瓦 A

-3 男瓦 A

-5 男瓦 A

-4 男瓦 A

-6 男瓦 A

図 28-1 男瓦 A

-2 男瓦 B

-3 男瓦 D

-4 男瓦 B

-5 男瓦 D

図 29-1 女瓦 A

図 30-1 女瓦 A

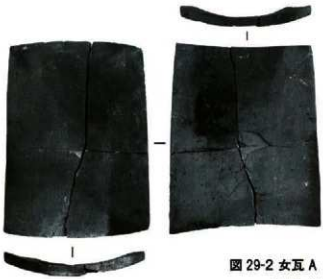


図 29-2 女瓦 A

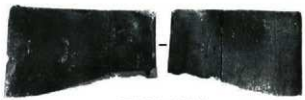


図 30-4 女瓦 A

図 31-2 女瓦 A

男瓦・女瓦A類

図 33-2 女瓦 A

図 33-3 女瓦 A

図 34-2 女瓦 A

図 34-3 女瓦 A

図 35-1 女瓦 A

図 35-2 女瓦 A

図 36-1 女瓦 A

図 36-2 女瓦 A

図 36-3 女瓦 A

図 38-1女瓦 A

図 38-2 女瓦 A

図 38-3 女瓦 A

図 39-1 女瓦 B

-2 女瓦 B

-3 女瓦 B

-4 女瓦 B

-5 女瓦 B

女瓦 A・B 類

図版 18

図 39-6 女瓦 C

図 40-1 女瓦 C

図 40-2 女瓦 C

図 40-3 女瓦 C

図 41-1 女瓦 C

図 41-2 女瓦 C

図 41-3 女瓦 C

図 41-4 女瓦 C

図 42-1 女瓦 C

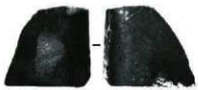


図 42-2 女瓦 C

図 42-3 女瓦 C

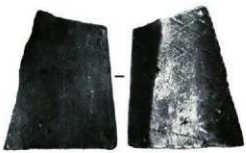


図 43-1 女瓦 C

図 43-2 女瓦 C

女瓦 C 類

図 44-1 女瓦 D

図 44-2 女瓦 D

図 44-3 女瓦 D

図 45-1 女瓦 D

図 45-2 女瓦 D

図 46-1 女瓦 D

図 46-2 女瓦 D

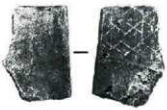


図 46-3 女瓦 D

図 47-1 女瓦 D

図 47-2 女瓦 D

図 47-3 女瓦 D

図 47-4 女瓦 D

図 48-1 女瓦 D

図 48-2 女瓦 D

図 48-3 女瓦 E

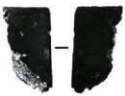


図 48-5 女瓦 E

図 48-4 女瓦 E

図 48-6 鬼瓦 YO I 不明

女瓦 D 類・E 類、鬼瓦

図版 20

図 49-1 YMⅠ01a（宗清）女瓦 A

図 49-2 YMⅠ04a（文長）女瓦 A

図 50-1 YMⅡ01a（文暦二年永福寺）女瓦 D

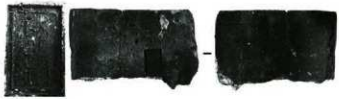


図 49-3 YMⅡ01a（文暦二年永福寺）女瓦 D

図 50-2 YMⅡ06a（永福寺）女瓦 D

図 50-3 YMⅡ02b（永福寺）女瓦 D

図 50-4 YMⅡ02a（永福寺）女瓦 D

図 51-1 YMⅡ02b（永福寺）女瓦 D

図 53-1 三角文 女瓦 D

図 53-2 三角文 女瓦 D

図 53-3 三角文 女瓦 D

図 55-2 竹管文

図 55-1 竹管文 女瓦 D

図 54-1 竹管文 女瓦 D

図 55-3 竹管文 女瓦 D

2溝上層出土の樹皮

Ⅰ-A 区2溝上層出土頭骨

0　30cm

0　15cm

文字瓦、樹皮、頭骨

報告書抄録

ふりがな	くにしていしせきようふくじあと
書名	国指定史跡永福寺跡
副書名	国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書－平成19年度－
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	福田　誠　永田史子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	鎌倉市御成町18番10
発行年月日	平成23年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ようふくじあと 永福寺跡	かながわけん 神奈川県 かまくらしにばいどう 鎌倉市二階堂	14204	61	35度 19分 30秒	139度 34分 14秒	20071129 ～ 20080201	316.2㎡	史跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永福寺跡	寺院跡	鎌倉時代 ～ 室町時代	三堂背後の溝、柱穴列、切岸	蓮華文軒丸瓦、巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、寺銘瓦	源頼朝が創建した、三堂を中心とした浄土寺院

鎌倉市二階堂
国指定史跡
永福寺跡
国指定史跡永福寺跡史跡整備事業に係る
発掘調査報告書
－平成19年度－

発　行　日　平成23年3月31日

編集・発行　鎌倉市教育委員会

印　　刷　テクノヤマモト